a n t i d o t e

斎木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｎｔｉｄｏｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ３３１２ＢＧ

【作者名】
斎木

【あらすじ】
事故や事件は、日常、気づかないところで細々と起こっていたりします。
ヒマで活力のない高校生のハルと羽山が、そういったものを追ったり、スルーしたり、見落としたりします。

必ずしも要の無い序章

「ａｎｔｉｄｏｔｅ（アンチドート）の意味、知っている？」

二月の屋上は寒い。無駄話を始めた二人は置いて、さっさと作業にかかろうと天体望遠鏡を転がす。

早くストーブの側に戻りたい。

「答えてられる？　もちろん、辞書はなし」

羽山が無表情に詰め寄る。かわいそうに、あれじゃプレッシャーだ。聞かれた方は圧されて、頭が回らなくなってしまう。ただでさえ寒さで脳が凍りつきそうだというのに。

「えっと……」

凛は顔もそらせず、曖昧に笑う。白くなった互いの息が混じる。異性だったら訴えられる距離だ。がんばれ。

「知らなくても、考えればわかるな。半分は」

横からフォローだか野次だか、自分でもわからない声をかける。

「推測は出来る？」

「え、いや、全然」

「ａｎｔｉは反対を意味する接頭語。皆知っている、ほとんど日本語みたいなもの。じゃぁ、ｄｏｔｅは？」

「えっと……」

そりゃ無理だろ。由来はドイツ語あたりだ。

「毒。反対に毒で、即ち解毒」

西洋をモチーフにしたＲＰＧでもやっていれば知っている程度の単語だ。威張れるものじゃない。問題は、この先。

「仮に、あなたが毒を飲んだとして」

凛が顎を引く。この続きは二年くらい前に聞いたから、知っている。僕も答えられなかった。

「一生懸命、解毒剤を探しているとする。目の前にあったとしても、ａｎｔｉｄｏｔｅと書かれていたとしたら、見つけられる？」

「にゃー、無理っす」
「無理だな」
「うん。正解。無理ね」
満足したらしく、顔を引っ込める。相変わらず表情は無い。
「火事場の馬鹿力は筋肉だけのもので、脳には無い。緊急時にできることは、日ごろできることだけ。それも焦るから、いつも通りとはいかない可能性が高い」
と、言っている本人が動揺とかけ離れている存在だから、説得力が乏しい。
皮肉に笑う。やはり、僕が言うべきだったか。
「結局、とっさのパフォーマンスは落ちる、ってことだよな。ヒーローでもない限り、覚醒なんかしない。日ごろ、反復練習をするのはそのためだ。考えなくても、できるようにさ。あるいは、ミスを減らすように」
「ハルはちゃんと、練習はしてきたと思ってるけどね」
羽山はうんうんと何度も頷く。
トレーニングは一緒にやったからなぁ。
「別に、馬鹿にしたわけじゃないもの……」
「そこはわかってる」
ただ、説明しろと言われたら、どうしても脅迫めいたものになってしまうのだ。僕も羽山も、前に一度失敗しているから。情けない話。
「わかったのなら、再開、再開。二人とも、じゃなくてハル、集中して」
へい、と頷いて柵をよじ登る。手のひらと制服が汚れた。
壁側に降り立って、柵の隙間から手を伸ばす。
「羽山、レンズキャップ、くれ」
「はい」
羽山から天体望遠鏡のレンズキャップを受け取り、縁に置く。
これで大丈夫、失敗しても言い訳が立つ……かもしれない。
「それじゃ、やってみる」

引く気は無いが、恐怖が無いわけではない。
静かに深く息を吸って、口笛を吹くように細く吐き出す。
「あの……ハルさん、本当にやるんですか？」
「うん」何を今更。
死んで詫びる。謝罪としては最上級のものだろう。死にたくは無いが、僕は謝罪がしたいのだ。
「悪いのは、ハルさんじゃないですよ？」
「そうかな」
反駁が億劫だったので、それ以上は聞かないことにした。
振り返って、外へと背を向ける。
泣き出しそうな凛と、少しだけニヤついている羽山。
二人共に手を振って、縁から一歩後ろに踏み出す。
思い出したように重力がかかる。
内臓が浮き上がるような感覚には、未だに慣れない。
「それじゃ、また――」
後で、は僕と一緒に落ちて行った。

新学期からテンション高い奴は死ねばいい

（あー、今日も流石の安定。ろくでもないな）

机に上半身を預け、椅子を前後に揺する。ため息はつかない。

今朝は人が死んでいた。自殺だ。真昼間に高層ビルの上から飛び降りたらしい。

現実だが身近ではない、新聞記事だから同情はない。

タップしてページを捲る。

（円の上昇……外国行かないし）

事故も事件も問題も、携帯経由の新聞で簡単に見られる。ほとんどが犯罪か経済、政治関連の情報なのだが。これ、毎日毎日書いている方はどんな気持ちなのだろう。

（地方紙にでも乗り換えようかなー……）

購読しているのは大手のネット版だ。もう何年も継続しているというのに、記事の内容に近親感を持てないでいる。同じ国で起こっている事のはずなのに、現実じゃないみたいだ。

今のところ、今年で潰れてしまいそうな我が天文部の方が、よほどか深刻に感じている。

（……はぁ）

今度はため息。

机に携帯と頬を置く。朝の教室は、人が疎らで、静かだ。クラスではこの時間と放課後だけが、安げる。

「ハル、また新聞？」

後頭部を指で突かれる。結構どきっとするから辞めて欲しい。

犯人は知れているが、確認のため振り返る。おろしたての針金みたいな、真っ直ぐな髪と、陶磁器のような顔。当たり前だけど、わが校のブレザー。でも着ていなければ、動き出した市松人形にも見える。

「……羽山か。おはよう」

「おはよう。私でなかったら、誰だと思うの？　幽霊？」
朝っぱらから余計な言葉だ。僕にはこの能面しか友人がいない。
もっとも、それはお互い様なのだが。
「うるさいな……んで、新聞が何？」
「おもしろいかなって。その新聞って右寄だし、ネットニュースかポータブルサイトの方が中立だしお手軽じゃない？　あと、政治欄見た？」
えらい多いな、質問。
「いや、まだ学校来たばっかりで。そっちこそ、何かある？」
「特に」
「そんなもんか」
「そう。そもそも毎日毎日、真新しいニュースがある方がどうかしている。ＣＮＮやＡＢＣあたりでも見ていればまた違うと思うけど、英語は読むのに時間がかかるから難しい。他の言語はわからないから論外。あと私、トイレ。また後でね」
翻訳ソフトでも使えばいいだろって、突っ込みが追いつかない。
言いたいことだけ言って、わが友は教室からさっさと出て行く。荷物だけ置きに来たのか。
「あー、いってらっしゃい」
やや早足の羽山に軽く手を振ってやる。背中が消えると、廊下の窓越しにほとんど花の散った桜が目に入った。
「……もう二年、か」
この高校に入ってから、二度目の春だ。改めて、よく無事に進級できたと思う。今年はどうだろうか。部活だけでなく、羽山と同じクラスになれたのは救いだが、それだけで上手くいくとは限らない。
（今年も、あんまり変わりなさそうだなぁ……まぁ、そんなもんだろうけど。でも、部室なくなるとマジでめんどい）
学校生活は嫌でもないし、辛くもない。そして好きでもない。
なんとなく、早く終わらないかなと思う。
思うだけだけど。

ニュースの続きを読む。
うっかり閉じてしまっていたので、再ロード。やはり一面で、人が死んでいた。余計気が滅入る。指でタップして、頁を捲る。経済や、政治の方がマシだ。スポーツ欄は後ろにあるが、興味が無いのでスルー。
「ふぅん……」
適当に見出に目を通す。まだ眠気が残っているので、あまり真面目には読めない。
読み進むにつれ、周りに人の気配が増えていく。クラスメイト達だ。朝だというに、ずいぶんと騒がしい。新学期が始まったばかりで、よくこんなに仲良くなれるものだ。
うらやましい。
「ほら、席に付けー！」
クラスの喧騒とはまた違う、低い声が響く。担任の……誰だっけ。中年の男性。体育の担当だったとは覚えているが、名前が出てこない。
新学期が始まってから二週間は経つというのに、まだ羽山以外の誰の名前……どころか顔すら覚えられていない。
そして、多分、覚え切れないまま卒業するのだろう。
「きりーつ、れい」
日直の号令に従い、皆が立ち上がって頭を垂れる。着席は言わないが、座るタイミングは大体同じで揃っている。
まばらな私語と共に、担任の体育教師の話が続く。
「飯島が欠席しているが、知っている奴はいるか？」
少しのざわめきの後、「メールで、熱あるから休むって言っていました」と誰かが返す。
だったら友人じゃなく学校に連絡しろよ、と思うが口には出さない。
そもそも、僕なら誰にもしない。
携帯が振動する。
ばれない様に机の陰になるように見る。わかってはいたが、羽山か

らだ。「昼の場所は？」あいつの言葉はメールでも口でも、基本、長いか短いかの二択だ。
「晴れている限りは屋上で」と打ち返し、一時限目の英語の教科書を机から引っこ抜く。さて、今から予習だ。当てられる前に、終わりますように。

天体望遠鏡を太陽に向ける。
「すごいぞオイ、今日の太陽核分裂絶好調。プロミネンスが龍のようだ！」
ややテンション高めに言ったのだが、羽山からの返事は無い。
サンドイッチを咀嚼する音だけが返る。
「……あー、えっと、ごめん」
少しの間をおいてから、羽山が精一杯軒を使ってくれた。
表情筋は死んだままだが、血管は拡張している。
多分、ちょっとそれっぽいリアクションを返そうかと思って辞めたのだろう。日ごろのテンションが低い人間が、無理に上げようとした結果がこれか。
「……うん、天気は良いよね」
まだ少し頬が赤い。後悔先に立たず。すまん。
「黒点は描けた？」
「これから」
大きな丸が描かれている、ハガキ大の紙。僕らは毎日毎日、ここに黒点を描いている。天文部として、屋上を使うためだ。
正直、天体に興味はほとんど無い。
パックの牛乳にストローを差し込みながら、羽山が思い出したように言う。
「もう一年経つのかぁ。続かないと思ったけど、案外保つね。ねぇハル、少しは太陽に興味沸いた？　発表会とか出てみたい？」

「この黒い点を集めて、何をどうするのか未だに理解していない。調べてもいない。そもそも、正直、屋上の合鍵作った時点でどうでもよくなってはいる」

「うん、同意」

では何故続けているのかといえば、単に習慣化したからだ。発表義務のある文化祭も、これを切り貼りすれば乗り切れるという利点もある。

「でも、今年までか？」

適当に黒点を描き写す。少しずれているが、気にしない。正確な資料は、もっと立派な観測所がやってくれているだろう。

「部員のこと？」

「そ。三人いないと部活でも同好会でもなくなるからな。三年が引退したらアウトだ」

ちなみに三年生は一人だけが在籍。部活外での関わりこそ多少あるものの、天体観測には全くやって来ない。

「ん、探す？」

望遠鏡を三脚から外し、短く畳む。まさか本気で言ってはいまい。

「当てがあるのなら。新入生も空振りだっただろ」

「そもそも振ったっけ？　勧誘する気、欠片でもあった？」

無かった。実際、ポスターすら作っていない。新入生のオリエンテーションでやる部活紹介もパスした。

三脚を畳みながら、小さくため息をつく。

「正直、来られてもというところだな。本気で教えること無いぞ。それに、そもそもの目的に反する」

僕らの目的は、あくまで屋上と部室だ。天文部の繁栄でも継続でも無い。

「プライベートスペース確保のために入ったのに、他人を招き入れなければ存続できない。パラドクス、と言うよりただの皮肉ね。いっそ幽霊部員募集中！　の張り紙でもする？　今からでも間に合いそうじゃない？」

それで来る奴って何が目的だ？
いや、そもそも生徒会から掲示許可が降りないだろうが。
「まー、いいんじゃないの」
「え？　どっちの意味で？」
「いや、来なくての方」
「そう？　最近、ちょっとしたゲーム貰ったから、やってみたかったけど。三～四人用だけど、部長来ないし。機会が無いまま捨てるのも勿体無いと思わない？　ハルはそんなに冷めたくないでしょ？」
「冷た……いや、別に拒否するとは言ってない。来ないなら来ないでもって……え、ゲーム？」
話がこんがらがった。あまりにも珍しいことを言うからだ。
「ハード、何か持っていたか？　羽山って、ゲームとかやる人種じゃないだろ」
「ハード？　カードだけど？」
会話が噛み合っていないのに、言いたいことだけはわかる不思議。
「ボードゲーム的なものか？」
「こんなの」
ブレザーの内ポケットから、小さな紙箱を取り出す。何でこんなの持ち歩いているんだろう。何も知らなければ、タバコの箱にしか見えない。
「中身はこんな……こん……」
思ったより硬かったらしく、カリカリと爪を立てる。苦戦の後、そのまま渡された。
「……あけて」
「そんな非力でもないだろお前……」
爪で舗装のビニールを切る。
開けられた中には、歩行者用信号機の中に居る人型と、小さなカードがそれぞれ数枚。それと折り畳まれた取扱説明書があった。
「ルールに従って、犯人と探偵に分かれる。心理ゲームね。頭も使いそうだし、天体観測よりは面白そうでしょ？　トレーニングにな

りそうだと思わない？」
トレーニングって、何のだ。脳のか。
「面白いかもしれないが、犯人当てじゃぁな。二人でやっても……」
ギィ、と傷んだノブの回る音がする。用務員さんでも来たのだろうか？　天文部です屋上の使用許可は貰っていますと、どもらないよう反論を用意しながら、ドアの方に顔を向ける。
「あ……」
少しだけ開いたドアの陰にいたのは、見たことのない女子が一人。ずいぶんと驚いた顔をしている。
「ごめんなさいっ！」
開けたときとは対照的に、バタンと大きな音を立ててドアを閉めた。
「……？」
閉じたドアを見ながら、しばし沈黙。羽山を見るが、思考は同じようだ。
「今の誰？　クラスメイトか？」
「ハル……キミ、まだクラス覚えていないの？　認識障害？」
散々な言われようだが、事実なので甘んじる。やはりクラスメイトか。知っている振りでもすればよかった。
「一年生でしょ、多分」
危ねぇ。
「よくわかるな。どこで判断するんだ？」
「二年は大体わかるでしょ、普通。あとは新一年と三年しか居ないから、わかりやすいと思うけど？　比べれば幼く見えるし、制服もきれいじゃない？」
「そうか？」
「そう、病気ね」
「……。あと、何で急に帰った？　僕ら、どうしたって怖そうには見えないよな？」
「犯人当てゲーム、私圧勝できる気がしてきた。ハル、少しは脳を使ったらどう？　若年性認知症になるよ？」

「……。推測だが」
静まれ感情。クールにいこう。
「屋上は普通、立ち入り禁止だ。そこに入ろうとして、見つかった……つまり罰せられると思った？」
ふむ、考えながらしゃべった割には、中々論理的である。まぁ、事実自体、こんなもんなのだろうけど。
「はいハズレ」
「嘘だろ！？　あ、いや、そうか。部活動の邪魔になると思ったから、か？　確かに、一人で知らない集団の中に入るのは嫌だよな」
「はい、またハズレ。むしろ遠ざかりましたばーか」
台詞に抑揚がある分、無表情で言われると非常に腹立たしい。
「いや待て、おかしいだろ。理由はなんだ？　間違っているって言うなら、まず一つ目から説明しろ」
そんなに奇抜なことを言ったつもりはない。
適当に馬鹿にされてたまるか。
「一つ目って、罰せられるかもって話だっけ？　あのね、それはどう考えても変でしょ。同じ違反者がどうやって罰するって言うの？　私たちが教師か用務員なら兎も角」
むう……。確かに、それはそうか。
だが突っ込みどころはまだある。
「それは僕らが部活やっているって思ったからじゃないのか？」
二つ目の推測。これはそんなに間違っているとは思えない。可能性の一つとして、完全に無視は出来ないはずだ。
「望遠鏡と三脚を仕舞っていなければ、そうだったかもね」
「……あ」
そういえば、黒点を描いてからさっさと畳んだような。
「いやでも、畳んだものを見た可能性も……」
「畳んだ望遠鏡と三脚って、ぱっと見てそれとわかる？　それに、位置的にハルの陰で死角じゃないの？」
「そうかもしれないが、しかし……」

「仮に見えていたとしても、連想は難しいと思うよ。今は昼だもの。普通、天文部って言ったら、星でしょ？　夕方から夜に活動すると思うんじゃないの？」

そう言えば、そんな気もするような。

黒点観察は昼休みの自由空間確保ための、適当な理由付けだった。

「それにね、さっきまで話していたじゃない。私たちはポスター貼りも勧誘もやっていないって。つまり、天文部があることを一年生は知らないはずでしょ？」

目的はプライベートスペースの確保。

我が部は、一切の広報活動をやっていない。

「ぐ……」

深追いして、カウンターを食らった。

天井を見上げるボクサーの気分だ。

もちろん、さっきの彼女がオリエンテーションを休んでいたり、聞き流していたりした可能性もあるにはある。が、これだけ言われた後だ。反論の拠り代にするには弱すぎる。

ギブアップだ、両手を挙げる。

「わかった。答えは？」

「簡単でしょ。逢引していると思われたんじゃない」

「アイ……？」

「逢引。デート。キャッキャウフフ」

「してたか？」

少なくとも、身体的接触は無かったと思う。

「思うのは個人の自由」

能面のまま淡々と言う。

「うーむ」

反駁はないが、感情面で納得ができない。

「思い込みや先入観を加味しても、そんなに変だとは思わないけど？　男女二人、昼休み、人気の無い場所。これだけ言うと、X指定のキャッチコピーみたいじゃない？」

「昼休みってよりは放課後じゃないか？」
「へえ、そっちが好み？」
「……一般論だ。でも、待ってくれ。どうしてカップルがいると戻るんだ」
「気まずいからじゃない？」
「平気な奴だっているだろ」
「あのコは駄目だったんじゃないの？　この時期に、昼休みに、一人でくるようなコでしょ？」
「あー、そうか。コミュニケーション駄目なタイプか」
仲間である。
「自分に近いことは察しがいいね。それじゃ、これでＱＥＤ、オーケ？」
おーけー。

新学期からテンション高い奴は死ねばいい（後書き）

よろしければ、感想おねがいしますm（＿＿）m

仲間というよりは単に同類（前書き）

屋上からの続きです

仲間というよりは単に同類

「そういえば、今日はどうする？」
「何が？」
放課後、と言いかけて思いとどまる。
「……部活」
「道場いかないの？」
わずかに首をかしげる羽山。言っておいてよかった。コイツは、携帯を携帯しない。大抵は鞄に入れっぱなしなのだ。
「今日は無いって、メールあった。見てない？」
「見てない、着てない」
一斉送信だったから、届いてないはずはない。していないのは確認だ。
「急に暇かぁ。バイトもないし、何かやる？」
中身がない部活なので、いざやると言っても、活動内容と目的がない。
「そうだな、勧誘でもするか？」
「そうね、しようか」
いや、冗談だったのだが。
「ポスターくらいは描こうか。昼休みと放課後に活動しています、いつでも歓迎です、って」
「えー……」
面倒なことになった。
「そう言わない。やることないでしょ？」
「それはそうだけどさ……」
やることがないからと言っても、やりたくないことはやりたくない。
「部室ずっと欲しいでしょ？　屋上にもっと居たいでしょ？　クラスで二人ボッチは囲居心地悪いって思ってるでしょ？」
いや、ま、確かにそうだ。

クラスではもう、友人グループが出来上がっている。それには今更加われないし、そもそも加わりたくもない。
独りはそれなりに寂しいが、それ以上に集団が辛い。側に居たくすらないのだ。
駄目なところと自覚はしているが、そう簡単に治せるものでもない。だからと言っても、すんなり頷くなどできない。
「どうしたんだよ、急に。今まで何も言わなかっただろ？」
「ちょっと考えたのよ、さっきの娘のこと。どうしてこんなとこに来たんだろうって」
「はぁ」
「それで、思いついたの！」
ほんのわずかに高い声。口の端も、よく見れば上がっている。余りないことなので、やや期待。やや意外は不安。
「何を？」
「さっきの娘、招き入れよう。我が天文部に」
意味がわからないよ。
「何で？」
実は馬鹿じゃないのか、お前？
「さっきからもう何でどうしてと、五Ｗ一Ｈでも制覇するつもり？　あの娘が一人ぼっちみたいだったからに決まっているでしょ」
はぁ。
「そんな傷の舐め合いしても……」
思いっきり呆れた顔をしてみせる。そんなことをして何になるのだ。そもそも、一人ぼっちだと決まったわけでもない。
「甘い、甘い、ハル」と指を振る。
「もう仲間作ってお昼一緒に食べてなきゃいけないこの時期に、一人で屋上に来たってことはね、はい、どう思う？」
「いや……友達いないとか？」
さっき話したと思う。しかも、それだけで決定的というわけでもないだろう。

「そう、あの娘は一人ぼっち……少なくとも、その可能性は高い。部活も入っていないでしょうね。部室に逃げてないところを考えると。コミュニケーション苦手なのかも」

そら、そうかもしれないけど。人に散々言った割には随分強引な仮定ではないだろうか。

あと、コミュニケーション云々は僕らが言っていいことじゃない。

「羽山、人と接する云々はな？」

「さっき、私たち見てさっさと撤退したあたりが証明してくれるんじゃない？」

いや、能力の高低ではなく、だな。僕らが言うなと。

「と言うことは、よ。仮にウチの部に入ったとしても、馴染めなくって、いずれ部活にも来なくなるかもしれないじゃない？　チャンスよ！」

うわ、腐った意見だ。ｗｉｎ－ｗｉｎの関係でも築くのかと思っていたのに。

だが、採用。

「よし、勧誘しよう」

「やる気出た？」

「プライベートスペースは大事だからな」

結局、僕も腐っているのだ。

「そうこなくちゃ」

「でも、どうするんだ？　さっきの娘、名前も何も知らないんだろ？」

一年のクラスを片端から当たれば見つかるだろうが、それは嫌だ。

「だから、考えなさい。新学期が始まって約一ヶ月。黒点観察はずっとやっていたけど、ここにあの娘が来たのは初めてでしょ？」

「ん、ああ……」

と言うことは、つまり？

「新学期からずっとじゃなく……今までは上手くやっていて、今日か昨日、何か問題を起こした……？　喧嘩したとか、彼氏に振られ

たとか」
「そう、いい感じの不幸ね。かわいそう」
結構な言い様である。
「他の可能性は？」
「えー……んじゃあ、馴染もうとしていたけど上手くいかず、ついに居たたまれなくなって教室から出てきた？」
「うん。どっちでもいいけど、私的には後者であって欲しいわね」
「……うん、まぁ。で、それが？」
「どっちの場合でも、よ。あの娘は今まさに諦めて、一人で食事できる感じの、目立たない場所探しているわけでしょう？　今日ポスター描いて、明日そういった場所に貼れば目につくと思わない？　むしろ、貼っているときに会えるかも？」
ああ、なるほど。
足で勝負か。
「あれ、でも待て。掲示物って、確か決まった場所にしか貼っちゃいけないような……？」
昇降口と、廊下の踊り場の掲示板くらいにしか貼れなかったはずだ。それも、もうすでに満杯を超えて、掲示板の端っこに無理やりピンを刺して留めている状態だったと思う。
貼れるのか、そこに。
「今日は何日？」
「二十八日だけど、それがどうした」
「部活勧誘の期限は？」
「今月末……まさか、お前」
「うん。違反掲示物は見つかり次第剥がされるけど、逆に言えば剥がされるまでは貼れるってことじゃない？　急いで今日作っても、どうせ二日しか貼れないんだから、どこに貼っても似たようなものでしょ」
「後で怒られるかもよ？」
「そのときは心を無にして受け入れなさい。豆腐みたいなメンタル

では、ボッチやっていられないでしょ。修行の一環」
修行……ボッチって、そんな高尚なものだったか？
「まぁ、いいけどさ。失うものもないし」
大学進学の意志は今のところ微妙だが、少なくともＡＯやらの推薦を使うつもりはない。内心に対するこだわりはゼロだ。
などとポスターの一つで打診してしまうあたり、我ながら小物臭が酷い。
「あれ、どうしたの？」
「ちょっと落ち込んだだけ」
「ふぅん？　気になるのなら、３時間目の休み時間に貼って、昼休みの終わりに回収する？」
「どっちでも。それより、今何分？」
「えっと、はい」
羽山が携帯を見せる。体感でなんとなく察していた通り、授業開始の十分前だ。望遠鏡の片付けもあるし、そろそろ戻らなくてはまずい。
「じゃあ、これ戻しておくから。先どうぞ」
「助かる。トイレ行きたかったんだ」
望遠鏡と三脚を抱える。ドアは羽山が開けてくれた。
「また放課後」
僕らは、基本的にクラスでは話さない。特別理由はないけれど、不文律みたいになっている。例外は朝の人が居ない時間帯くらいだ。
「また」
適当に羽山が手を振って別れる。
僕は部室にやや早足で向かった。さて、上手くいけばいいのだが。

仲間というよりは単に同類（後書き）

観想いただけると助かりますm（＿＿）m

気を使うのならば放っておいて欲しいけど、そんなこと言えない（前書き）

続き。放課後です。

気を使うのならば放っておいて欲しいけど、そんなこと言えない

「ポスターの許可取ってくる。部室先行って」
帰りのホームルームが終わると同時、携帯が震えた。羽山からのメールだ。
口で言えばいいのにと思い、羽山の席を見る。
姿がなかった。
（瞬間移動でもできんのか、あいつは）
昼休み以降、午後の授業を貫通して寝ていたはずなのだが。何時の間に。
（……まぁいいか）
素直に従い部室に向かうことにした。返信はしない。
教室のある三階から、校舎の端の西階段を一つ下りる。
面倒だが、部室には直接行けない。二階の端にある職員室まで出向き、鍵を貰う必要があるのだ。面倒だが。
（……しくった）
二階に降りたと同時、後悔。
帰りの時間がかぶったらしく、二階廊下は三年生でごったがえしていた。いつもは西端の階段を使うのだが、今日に限ってボケた。
だが、今更戻る気もしない。壁と一体化するようにすり抜け、職員室へ。
「すいません」
入り口の傍、壁にかけられた鍵の中から「地学室」のタグの付いた鍵を取る。泥棒みたいにすぐに出て、無言でドアを閉めた。
あとはもう、問題ない。手前の階段まで戻り、一階昇降口まで降りる。
（ああ、そうだ、本……）
昇降口脇には図書室がある。公立のせいか偏差値のせいか、館ではなく室なのが気になるが、それなりに広くコピー機まであって重宝

している。
（羽山が来るまで少しあるだろうし、何か借りて……いや、返してなかったっけ？）
そういえば、先週小説を借りたままだった気がする。
しかも、まだ読んでない。
（いいか……今度で）
諦める。所詮は思いつきなのでどうでもいい。
途中、自動販売機でコーヒーを購入してから、渡り廊下を通り、向かいの特別棟に向かう。
「あー……このクソ移動がな……」
本校舎向かいの特別棟に行くには、さらに一階まで降りて、渡り廊下を通らなければならない。二階にも連絡路があればいいのだが、増改築する予定はないそうだ。公立万歳。
（まぁ、羽山よりはマシか）
渡り廊下の左手、おおよそ百メートル先にある食堂を見やる。あそこの二階の奥の部屋が生徒会室だ。行って帰って部室に向かっては、面倒臭すぎる。
渡り廊下を抜けて特別棟に入り、三階まで上る。
これでやっと、部室に到着だ。
疲れた。
日ごろ運動はしているが、疲れた。
「こんにちはー……」
生物室の鍵を開ける。教室ではなく、併設されている準備室の方を。
稀に先生がいるときがあるので、挨拶も忘れない。今回は運が良く、誰も居なかったが。
真ん中に配置されている長机とパイプ椅子を避けて、細長い部屋の奥へ。薬品棚の前のコンピューターデスクの椅子を引き、腰を下ろす。
「……ふぅ」
缶コーヒーを片手で開けて、一口。甘みと苦味が口に広がる。

やっと一息つけた。
「ハル、貰ってきた！」
ガラッとドアが開く。
「ごっふッ！」
思い切り咽た。不意打ちだ。吐き出したコーヒーを手のひらで抑え戻す。
羽山はうろたえた僕には構わず、付箋のような紙の束を目の前垂らしてくる。
「どうしたの？　許可証だよ、これ」
紙束にはそれぞれ、「生徒会」の赤い判子が押されていた。
（そりゃよかったな……！！）
文句を言ってやりたかったが、今は無理だ。気管に入った。なんとか手のひらの中に吐き出して、ばれない様に舐めとる。
（くそ、早過ぎだろオイ）
渡り廊下を通ったときに、羽山の姿はなかった。あれからすぐ来たにしても早すぎる。
どうやって来たというのだ？
「ねぇ、ハルはこれ使える？」
羽山が机の上のパソコンを指す。
「……ああ、一応な」
言っている意味がよくわからないが、頷く。
「いや、それより羽山、一体どうやって――」
「良かった。私、あんまり得意じゃなくて。ポスター製作お願いね」
「ここに……って、え、ポスターって手描きじゃないのか？」
ちょっと待て。一旦疑問は置いておく。製作お願いって、しかもそれ、僕がやるのか？
「必要事項、大文字の太字で書くだけだもの。印刷のほうが楽でしょ？　これ、十枚もあるけど、逐一書きたい？」
そりゃ嫌だけど。予想と違う。
「イラストは？」

「誰が描けるの？」
それはそうか。
「できるのなら背景黒にして、白か黄色の水玉でも散らせて。無理なら無地で。そんなもので充分でしょ？　それとも拘りあったりする？」
「ない」
あるわけがない。と言うか、そもそも、やりたくない。
「じゃあ、お願い」
「プリンター、あるのか？」
「ないの？」
ねぇよ。
一年使っていてどうして知らないんだ。
「家には？」
「ないな」
「じゃ、コンビニでプリントね」
「そんなことできるのか？」
「うん。ネットにさえ繋がっていれば」
知らなかった。
どうやら問題はないらしい。この作業は無駄にはならないらしいと安心する。二割くらいは、無駄だったら中止になったのにと嘆いているが。
仕方ない、こうなったのならばさっさとやろう。
まず、文章作成ソフトを開く。
「そういや、サイズは？」
「適当でいいんじゃない？　掲示板のも統一性なかったし」
「じゃ、Ｂ５な。そんで、まずは『天文部』と太字で書くとして……あとは何書く？」
左肩に重み。羽山が圧しかかる。
「新入生歓迎。お一人様でもどうぞ」
「何だよ、お一人様って」

突っ込みつつも、言われた通り打ち込む。
拘りはない。断固。
「活動、改行、昼休み→屋上。放課後→生物室」
「ひるやすみ、やじるし……」
適当に改行して打ち込む。
「以上」
「いじょ……え、マジ？」
短すぎるだろう。全部大文字で書いても余るぞ。
「そのくらいで充分だって。来てくれればいいんだし。書きたいことあったら加えてもいいけど？　拘りある？」
「いやない」
「背景は黒にできる？」
「背景と文字色はわかるが、水玉はいじくってみないとだ」
「わからないなら、これでも大丈夫。百円シールでも買って貼るから」
「ああ、そっちのがいいな。見栄え的にも」
大雑把にレイアウトを整えて、背景と文字の色を変える。どれも数クリックで終わる。
「終了」
思ったより早く仕事が終った。
「ありがと」
もうやることがない。
「ってか、いかにも放課後毎日やっています！　みたいに書いているけど、どうなの？　多くて週三日だろ。増やすのか？」
「ううん、バイトと道場があるから無理。単に明日と明後日、どっちかが部室に居ればいいだけの話じゃない」
「僕、明日はヒマだけど、明後日はバイトだ。そっちもそうじゃなかったか？」
「風邪ひく予定」
「そこまでしてか……？」

恐ろしい。この辺だと高めの時給なのに。
「何かを得る以上、対価は必要だと思わない？」
「うーん、どうだろ。確実に得られるんならわからんでもないが」
「小さ。公務員にでもなれば？」
うるさい。平凡真ん中が何よりだろうが。
「なれるもんならなりたいけどな」
「そうなの？　そういえば、話したことなかったよね。将来の夢とかって。何になりたい？　何をしたい？」
「あー……何だろ。羽山は？」
肩を押される。もたれるのはやめ、ちゃんと立ったようだ。
「何だろうね？」
まぁ、そんなものか。
「イス変わって。データ、送るから」
了解、と頷いて立ちあがる。滑り込むように、羽山が座る。
「すぐ終わるから。ちょっと待っていてくれる？　百円ショップ行こう？」
「ああ」
そばのパイプ椅子に座る。
やることがないが、何かして潰さねばもたないほど、時間がかかるわけでもなさそうだ。
羽山の後姿を見ながら、ぼんやり考える。
思いつくのは、先程の一件。
（……そういや、こいつ、なんでこんなに早かったんだ？）
生徒会から許可を貰ってくるといっていたのに、部室に来たのはほとんど僕と同じ。数分の差はあったけど、それにしても早すぎる。
生徒会室は、教室からするとここととはまた逆方向にある、食堂の隣の一室である。
一階まで降りる手間は変わらないが、その後の移動距離は、ここまで来るのとほとんど変わらない。
（走ってきたとか？）

真っ先に浮かぶ可能性だが、却下。部室に入ってきたとき、羽山の息は乱れていなかった。それに、意味なく走るようなキャラではない。

（そもそも、授業終わってすぐ生徒会室行ったって、誰もいないだろうし……）

授業のコマ数は、どの学年でも変わらないはずだ。それはこの一月、授業中に窓の外を眺めて学んだ。

（と、なると許可証、既に手に入れていたのか？　生徒会に友人でもいるのなら、ありえ……ないか。却下）

羽山にも僕にも友人はいない。それに休み時間、あいつは授業を貫通してずっと寝ていたと思う。

以上から察すると、

（ひょっとして……あいつ、生徒会から許可証貰っていないんじゃ？）

自問自答だが、おそらく正解だろう。

では、あの視許可証はどこから手に入れたのか。どこかの部の余りを貰いでもした？　いや、それも違う。そんな気さくな関係の奴はいない。誰かから入手した可能性はない。

と、なるとだ。

（盗んだ……既に貼ってあるのを千切ってコピーしたか）

昇降口横の図書室には、コピー機がある。教室を出た後、そこに寄って印刷してから来れば、ちょうどあれくらいの時間差になったのではないだろうか。

（あー、くそ。面倒くさいことしやがって。今のうちに生徒会室行って、ちゃんと許可貰っておくか）

あのとき、図書室に寄っていればこんな面倒は避けられたのか。ちゃんと本、返してさえいれば。

無言で立ち上がり、部室を出ようとドアに触れる。

「ハル、どこ行くの？　トイレ？」

眼は画面に向けたまま、羽山が問う。

「あー……まぁ」
突っ込んでやろうかとも思ったが、辞める。わざわざ人が隠したものを明るみにすることもない。僕が申請して、そのままゴミ箱にでもぶち込めば問題はないのだ。
「生徒会室なら、行かないほうがいいよ？」
……え？
「どうせ貰えないから、許可証。無駄手間になるよ」
どうしてばれたのか、いや、そうではない。
「無駄手間って、何で？」
「うん。私ね、五、六時限に寝ながら考えたんだけど」
いや、寝ながら？
「夢で考えたんだけど。ポスター貼っていいのって、掲示板だけなわけじゃない？」
「まぁ、そうだな」
その規則を破ろうとした奴が何を言う。
「既に掲示板が万杯な今、掲示許可って下りると思う？　一部くらいならくれるかもしんないけど、欲しいのはもっとだよね？」
「……そうか」
そう言えば、そうか。貼るところがない。
羽山が立ち上がる。
「送信できた、行こっか」

気を使うのならば放っておいて欲しいけど、そんなこと言えない（後書き）

感想おねがいいたしますm（　）m

勉強なんて社会に出てから使わないとか言うけど、そもそも社会に出るために必

続き。下校です

学校を出て、駅の方面に向かう。
ここから駅までは、徒歩で二十分くらいかかる。二人黙って歩いて
いるには少し長い時間だが、住宅街なので周りに家以外何もない。
つまり話のネタもない。
というか、羽山と話すことなどもう既にほとんどない。何もない。
自然、どうしても黙りがちになる。
しかも昼の失敗があるので、あえて打破する気にもなれない。
友情ってなんだろう……。
（どうでもいいか、今更……）
などと思っていたら、
「ハルー？」
意外にも声が横からかかった。
「ん？」
目を向けると、羽山が上段で構えていた。
「ていっ」
振り下ろされる手刀。かわそうと思って、上半身をひねる。
普通に当たった。
「……ハル」
「いや、本気じゃなかったんだ。何も言うな」
「道場の意味ないね」
「そんなことはない……というか、不意打ちだからだ」
「そうだね、声かけたけどね。あ、こっち来ないと危ないよ、車道
出過ぎだよ？　それとも死にたい？」
うるせぇ。
つうか、不意打ちの意味が違う。
「あ、そうだ。今日、晩ご飯食べていかない？」
「何で？　っつか、何処で？」

「駅前のどっか。今日、誰も居なくてウチ。作るのも一人分は面倒なのよ」
「あー……安いとこなら付き合う」
「もちろん」
羽山と晩飯か。道場の帰り以外だと、ほとんど初めてのような気がする。
ようやく経済的余裕が生まれたんだなぁと嬉しく思う。バイトに感謝だ。
「何食べたい？」
「ワンコインが理想。だがファストフードはいやだ」
「難しくない？」
などと適当に話しているうちに、駅前通りに入る。
ここには我が市の全商力が注ぎ込まれており、ゲーセン、居酒屋、携帯ショップと商業施設が並び、そこそこの賑わいをみせている。
「じゃぁ、勝負しよう。勝った方が決める」
「いいけど、勝負って何やるんだ？」
「ゲーセン」
「音ゲー？」
「それしかできないもの」
「ついでに、少し教えてやるよ」
最近、バイトと道場にしか行っていない気がする。たまには遊びに行ってもいいか。

などと、考えたのが悪かった。

「最ッ悪……！」
思ったよりもはまってしまった。
太鼓にドラムにボタンを叩き、気がつけば店員に時間だからと追い

出された。
もう二十一時とは！
完全に時間も予算もオーバーした。
「あとちょっと、まだ戦えたのに！」
羽山はまだ悔やんでいる。これからお前が戦うのは、給料日までの財政難だ。
「メシは？」
もう制服でうろちょろしていていい時間ではないが、一応聞いておく。
「スーパーで値引きしてるの買って帰る……。お金使いすぎたもの」
「そだな」
二人しか居なくても満場一致。少し戻るが近くのスーパーに向かう。
「そういえば、コンビニあるじゃん」
「どこにでもあるけど」
「そうじゃない、アレだ、スーパーの前の、マイナーなヤツ。看板黄色の」
「あぁ……あそこ。名前なんだっけ？」
羽山の記憶力をもってして名前が出てこないのか。
まぁ、多分全国でもあそこだけだろってくらいの店だから仕方ないか。
「今くらいの時間だと、あのコンビニも半額やってる」
「コンビニも半額やるの？　大丈夫なの？」
「フランチャイズではなさそうだったからな」
「じゃ、順に見てみましょ。安いほうがいいもの」
「だな」
ゲームの銃の撃ち方について語りながら数分、スーパーのある、少し大きな通りに出る。
田舎だけあって、この時間になるとほとんど車がない。一台、スーパーの駐車場の側に路上駐車しているだけだ。おかげで、信号すら気にせず通りを渡れる。

「ハル、ストップ……」
通学鞄を掴まれる。
「ん？」
スーパーとコンビニは通りを挟んで向かい合っている。そして、僕らはスーパーの側にいる。わざわざ通りを渡ったのだから、コンビニでなく、こちらに先に入ると思っていたのだが。
「どしたの？」
と言いながら、羽山の意図を理解する。
パーカーの男が、カートを押しながらこちらに向かっていたのだ。
「あー、すいません」
謝るが、無視された。パーカーの男は僕らの手前で右に曲がり、レジの方に向かって行った。
少しムカついたが、まぁ構わない。それでは、
「……って、行かないのか？」
もう避けたし問題ないと思うのだが、羽山は鞄を放してくれなかった。
「あれ、見える？」
スーパーの中、レジの方を指す。
「どれだ、そんな眼よくないぞ僕は」
両目共に〇・四。
ちゃんとはっきり見えるのは、入ってすぐの青果コーナーのリンゴくらいだ。
「あのね、レジの横の、パンコーナー。従業員用の入り口みたいのがあるでしょ？」
「ん、ああ」
言われて見れば、確かに。押し戸があるようだが。
「そこの横。壁際。カゴが置いてある」
「ん？」
言われて見れば、壁に沿うようにカゴが置かれてあった。余り目が良くないので中身まではわからないが。

「レジもちょっと混んでるし」
「まぁ、この時間は人いないからな」
スーパーの通りに沿った面はガラス張りなので、ここからでもわかる。
レジは一台だけしか稼動しておらず、五人も並んでいた。
「でも、選んでいるうちにはけるだろ？」
「……嫌な感じ。コンビニにしよう」
「そうか？」
僕としては安ければどっちでも構わない。引き返し、通りを渡る。
「いらっしゃいませー！」
自動ドアをくぐるとすぐに、店員の大きな声に迎えられた。
会釈だけ返す。
「この辺りって治安悪かったっけ？」
弁当コーナーの前で屈みながら、羽山が言う。
「一番下に半額がまとまってるぞ……いや、治安は知らないが。偶に暴走族がいるくらいじゃないのか？」
「そう……」
「なんだよ、煮え切らないな」
「気になるなら、スーパーの入り口でも見張ってたら？　うまくすれば面白いものが見れるかも？」
「……え？」
「少なくとも、警察は来るよ。それもすぐ」
「マジ？」
「うん」
財布を羽山に渡し、晩飯を託して外に出た。もちろん、スーパーを見張りに。
（……おお？　マジか）
通りの奥から、光が見える。パトカーだ。言った通りに来やがった。
「あいつどんな……お？」
スーパーの出入り口から、先ほどの男が猛烈な勢いで出てきた。

何故か、カートを押したまま。
「……なんだ？」
「カゴダッシュよ」
いつの間にか、羽山が横に居た。はい、と弁当と財布をまとめて渡される。
「カゴ？　あ、警察降りた」
カゴを押したパーカーの男が、路上駐車していた車に乗り込もうとする。それを何故か、パトカーから降りた警察が止めに入る。
「何やってんだ、アレ？」
「だから、カゴダッシュ。商品カゴにつめて、会計済まさずにダッシュして逃げる。万引きの改悪版ね」
なんだそりゃ。
「さっきのヤツがそうだったのか？　あ、捕まってる」
「そうよ。さっきやろうとして、私達と鉢合っちゃったみたいだけど。リトライして、こんどは警察にぶつかったのね。かわいそうなバカ」
なるほど。
「……で、なんでわかった？」
「だって、カートのカゴの中、ビニール袋がなかったのもの」
いや、それもそうだけど。
僕が訊いたのはそっちじゃない。
「警察が来るって言った方だ。おもしろいものって、これだろ？」
「うん。そっちもカゴが理由。床に置いてあったでしょ？　覚えている？」
「パンのとこのやつか？　ドアの傍の」
「そ。あれ、何で置かれていたと思う？　トイレとか財布忘れたとかで置いていったんじゃないよ？」
「ん……？　それは……？」
何だろう。
「わからん」

本当にわからない。
「……今回はいっか。アレね、万引きの跡」
「跡？」
「そう。普通、万引きしてバレたら、店の人に事務所に連れていかれるでしょ？　イメージできる？」
「まぁ」
見たことないけど、そうなんじゃないかなとは思う。
「そのとき、カゴ持ってたら置いていかなきゃじゃない？　持って事務所に行くのも変じゃない？」
「……マジか」
「そ。レジが込んでいたのもそれが理由じゃない？　夜なんて店の人少ないのに、さらに万引きで人とられたんだからだと思うよ？」
「実際に警察きたし、そうなんだろうな……」
なるほど。
「しかしまぁ、よくわかるな」
「バイト、スーパーでもやったことあったから。知っていただけ。考えたわけじゃないよ」
そうだったのか？　それは知らなかった。
「でも万引き犯用に呼ばれた警察が、カゴダッシュ犯を捕まえる、って流れはちゃんと読んだんだろ？　こっちのタイミングがちゃんと合うって根拠は？」
「ううん、読んでない。たまたま」
「……ん？」
「鉢合うかどうかまでは、流石にわからないって。タイミング的に、そうなるかもって思っただけ」
いや、ちょっと待て。
わかっていて止めなかったのならば、つまり、羽山は、目の前の犯罪を放置したことになる。
嘘だろ？
「確証、なかったのか？」

「あるわけないでしょ」
別段、僕自身モラルが高いわけでもない。わけでもない、が。
「なら、止めればよかっただろ。少なくとも、警察が来るまで……」
それくらいはできたはずだ。
「駄目だよ、ハル。怖いもの」
「は？」
お前が怖い？　道場では僕よりも強いのに？
「キミは人の顔がわからないものね。さっきの人、日本人じゃなかったよ。どこかはわからないけど、アジアの人」
「それが」
何だというのだ、と言い切る前に反論が来る。
「日本の治安のよさは知ってる？　日本人の民度の高さは？」
「いや、それが……」
「法を犯す人は日本人でも怖い人よ。外国の人となれば尚更。何やるかわからない。殴られるのならばいいけど、もしナイフなんて出されたら……死んじゃうよ」
じっと僕を見る。おかしいと思うけど、言葉が紡げない。
だって、僕らは、
「そうならないために、道場に通っているんだろ？」
「うん。でも、それは巻き込まれたときに守るためだよ、ハル。あくまで。かわせるなら、そっちの方がいい」
君子危きに近寄らず。羽山の言いたいことはわかる。
わかるのだが。
「意味なくないか、それじゃ」
学校帰り、羽山に言われた言葉を返す。
「なくはないよ。本当にどうしようもなく巻き込まれたら、問題解決の選択肢の一つになる。でも、その程度」
「……」
騒ぎに気づき始めた客が、スーパーから見物に出てくる。コンビニの店員も、店の外に出てきた。

「それじゃ、そろそろ帰ろ」
羽山が促す。ここからだと、帰路は別になる。
ああ、と頷いて、僕は手を小さく振った。

延々と続く無理数を見ると機械性を感じるが、その機械を作るのは人間しかいな

翌日。

延々と続く無理数を見ると機械性を感じるが、その機械を作るのは人間しかいな

キンコンと録音されたベル音が教室に流れる。
「……眠い」
午前中の授業を全て寝潰して、ようやく席を立つ。四時間以上、この席から動いていなかったので、体が固まってしまった。痛い。
「あいつは……流石だ」
羽山の姿は既に無い。
ポスターを貼るついでに探してくると、今日は朝から動いていた。
（しまったな……手伝おうとは思ってたんだけど）
今更言っても遅い。せめて、剥がすときだけでも手伝おう。
一度伸びをする。
職員室には多分、羽山がもう寄っていっているだろう。
今日は直接屋上に行けばいい。楽だな。
「ん？」
腰の辺りから、振動を感じる。携帯だ。
ポケットから取り出して見ると、意外にも着信だった。
通話ボタンを押す。相手はもちろん
「羽山か？」
「そう。ハル、今、教室？」
「そうだけど。悪いな、ポスター、寝てて」
「そんなのいいの。それよりハル、鞄持ってこっち、特別棟来て。早く！　一階西端階段！」
「西階段……？」
本校舎にも特別棟にも階段はそれぞれ端と中央に計三つある。西階段、とは本校舎を背にして左の端の階段……だったか？　日ごろ東西南北なんて意識しないからなぁ。
「食堂よりだから！」
「ああ、食堂？　そりゃわかったけど、鞄って僕のかって切りやが

ったくそ」
何だというのだ、一体。珍しく切羽詰ったようだったが。
（……しゃあない）
鞄は僕のを持って行く。どうせ、似たようなものしか入っていない。
急ぐが、走らない。早足でとんとんと一階昇降口まで落ちるように
跳び降りる。ついでに自動販売機でパックの豆乳（コーヒー味）を
購入しようかと思ったが、くそ、我慢して渡り廊下へ抜ける。
（うっわ……あの中には生涯入るまい）
渡り廊下左手奥、ごった返す食堂を横目に見ながら、特別棟に入る。
あとは西階段とやらまで行けば、羽山に会えるだろう。
「あれ？」
携帯が震える。かけてくる人間は非常に限られているから、予想は
つく。
「羽山か？　どうした」
「ハル、今どこ？」
「特別棟入ったとこだけど」
一方的に電話が切られる。
舐めんな。
流石に文句を言ってやろうと、〇・四の視力を凝らす。
左手に、確かに女子の姿はあった。羽山と、なんとなく予感はして
いたが、もう一人。
予想と違うのは、片方がうつ伏せに倒れていることだろうか。
「ハル！　こっち来てこっち」
羽山が大きく手を振る。
「ああ」
早めに歩く。
「駆け足！」
何だよ、走るのかよ。
「オイ顎で使ってんじゃ……って、どうしたんだ、その娘？」
近づいてわかったが、倒れているというよりは蹲っているといった

ほうが正しいみたいだ。うつ伏せなので表情は良く見えないが、苦しそうである。
「階段から落ちたみたい。テープ持ってる？　あと湿布は？」
「両方あるよ」
鞄はどちらのものでも良かったらしい。僕らは道場へは学校帰りに直接行く。ファーストエイド・キットは欠かせない。
「捻挫？」
「多分」
「処置は任せていいか？」
「ええ」
鞄を開けて、羽山に渡す。教科書も何も入っていないので、すぐにわかるだろう。
（……拾っとくか）
廊下の端に飛び散った、彼女のものと思しき筆記用具に眼をやる。やれやれ、きれいに弾けてやがる。
彼女の傍に転がったアルミの筆箱を拾う。軽くへこんでいるが、まだ使えるだろう。ふたを開け閉めして確かめる。
（あとは……）
壁際に転がったシャープペン類や消しゴム、ホッチキスを、腰をかがめて拾う。結構激しく転んだのか、えらく遠くまで転がっている。階段の前だけではなく、廊下の方にまで……。
（あん？）
羽山を見やる。応急処置で、女子の踵にシップを貼り、上からテープを巻いていた。
数秒ほど睨みつけていたら、こっちに気づいたらしくウインクしてきた。
キャラが崩れているぞオイ……。
アホらしくなって、回収作業に戻る。
……ああ、くそ、この野郎。

「今更なんだけどさ」
応急処置を終え、生物準備室こと天文部部室に移った。倒れていた彼女の移動は羽山が王子様のようにスムーズに行った。
「何？」
長机を挟んで、羽山が問う。抑揚はあるが、表情は何時も通り無い。
「保健室行けばよかったんじゃないか？」
道場で慣れているとはいえ、僕らの措置は本を読んだだけの適当なものだ。保険医のほうが的確であるのは間違いないはずだ。
「そうだけど、気が動転していたから。支倉凛さんも動けなさそうだったし」
支倉……何でフルネーム？
「空気を読んで見たんだけど、何か悪い？　駄目なの？」
「……あの、ごめんなさい」
ガンガン押してくるところ悪いが羽山、当の本人は萎縮しているぞ。
「いや、別にいいけど」
責めるつもりも詮索するつもりも無い。問いただしたいことは、羽山にはあるけれど。
そもそも何で、この支倉凛とやらを部室まで運んだんだ。勧誘する気かここで？
「ところで支倉凛さん、あなた部活入っている？　天文部入らない？」
あ、勧誘する気だ。
えげつないな……。
「昼休み、屋上かここでいつも観測してるの。暇つぶしになるよ？　悪くないと思わない？」
怪我しているところを助けられてからの誘い。はっきり断れるやつは日本人じゃないと思う。
「あ、はい……」

どこに持っていたのか、入部届けを差し出す。
「入部してくれる？　部員これだけだから、ね？」
作戦は押しだけかアスペルガー。なにが「ね？」だ。
「羽山、ちょっと待て」
「何で？」
何でじゃねぇよ、くそ。
「あー……支倉さん、昼飯はある？」
「無いです。購買で買おうと思っていたので……」
よかった、助かった。
「んじゃ、代わりに買ってくるよ。羽山、付き合え」
普通に考えて、羽山が付いて来る必要は無い。
なので、睨む。
迫力は無いだろうが、今回はこちらの方が都合が良い。
「……ふぅん、オッケー」
羽山はコミュ障だが馬鹿では無い、こちらの意図が伝わったようだ。
「でもそんな、悪いですよ」
「ついでだし、売れ残り適当に買ってくるだけだから」
「ちょっと待っててね」
無表情なりに精一杯笑顔を作り、生物準備室を出た。
出てから、階段まで早足。
大きく息を吸って、でも喉を震わせないように一気に吐き出す。
「押しすぎだ！」
「まだ押せてない」
「判子の話じゃない！　それに、さっきの。あれ意図は何だ？」
一階まで降りてから、ちゃんと声帯を震わせる。ややきつい感じになってしまうのは、興奮しているからだ。
抑えようが無い。
「何のこと？」
「とぼけるなよ。あの支倉さん、だっけ？　電話までしておかしいと思ったんだ。さっきも言ったが、保健室に連れて行けばいい。気

が動転したってのなんだ、ギャグか？」
「私だって動転くらいするけど」
「あのくらいじゃお前はしねぇよ。拒否されたんだろ？」
「ノーコメント」
「じゃぁ核心から言う。お前、単に、あの娘が苛められているって教えたかったんだろ？」
瞬きを二回。人形のようにする。
「……残念。ちゃんとわかってたんだ」
事実を突きつけたら誤魔化さなくなるのは、羽山のギリギリ良いところだ。
「ひょっとしたら気づかないかもって思ってた」
「そりゃ流石にない。下り階段でうつ伏せに倒れている時点で違和感がある。普通、踏み外すとしたら後ろに倒れるだろ？」
他の学生ならばいざ知らず。僕らが道場で何をやっていると思っている。
「うん、そうね。でも、縁に引っ掛かったりした可能性もあるわけじゃない？　それは考えなかったの？」
「無くは無いけど、他考えると微妙だったんだよな」
渡り廊下へは出ずに、特別棟の廊下を進む。
支倉凛が倒れていた場所を通るためだ。
「筆箱と飛び散った筆記用具の位置がおかしかったんだよ。筆箱はここにあっただろ？」
と、階段のすぐ傍、彼女が倒れていた場所を指す。
「で、筆記用具類はあっち。ものによっては、もっと廊下の……東側まで転がっていた。離れすぎてないか？」
「勢い良く飛び散ったとは？」
「それならバラバラに散るだろ。さっきのはきれいに端過ぎる。あれは誰かによって移動されたんだと考えたほうが自然だ」
自分で言っておきながら、嫌気がする。
できるならば想像すらしたくない。

しかし、言う。
「で、だ。倒れた人間を無視して、側に散らかった筆記用具を移動させるってシチュエーションってのはどんなのがあるのか考えてみたんだ。まぁ一つしか浮かばなかったよ……多分だけど、あの娘のクラスの誰かが、押し飛ばして倒して、挙句に横を通り過ぎたんだろ？　筆記用具を蹴り飛ばしながら」
実際はこれに罵詈雑言やらのオプションが加わったかもしれない。
加わらなくても、無言なら無言で痛々しい。
「うん、私も同じ考え。でも、推測はそれだけで？　無関心な同級生、またはたまたま倒れた姿が見つからなかったって可能性は？」
羽山の例は、可能性こそ低いもののありえることではある。僕が言ったことは、所詮脚色の濃い推測だろう。
しかし、間違っていないという確信はあった。
「オマケならある。確信した理由は、さっきも言ったが羽山、お前からの電話だ。そこそこ長い付き合いだから性格はわかっているつもりだ。なぁ、あれがただの単独事故だったら、お前は僕を呼んだか？」
「……正解。完璧最高」
褒められたのは嬉しいが、素直には喜べない。
これが正解ということは、羽山が見たことになるからだ。
倒れた個人に追い討ちをかける集団の姿を。
うんざりだ。
渡り廊下へ出る。食堂はピークを過ぎ、あれほど並んでいた生徒たちも大分がいなくなった。これなら近づいてもいいだろう。
「ねぇ、ハル？」
「何だ？」
「拍手しようか？」
「いらない。意図がわかって無いし。僕の同情引いて何になる？」
「んー……見てもらいたかったのよ」
「何だよ、それ」

「実際に見てもらいたかったの」
「いや、よくわからない」
「昨日さ、適当に話してたじゃない。いじめかもー……みたいなのを云々」
「ああ」
「よく考えるとおかしいような気がしない？　新学期って、始まってまだすぐなのに？」
「うん？」
「早すぎる気がするの。居場所が無い、話し相手が居ないはわかる。でも、いじめ？　そんなに早く起こる？」
「単にクラスが荒れているだけじゃないのか」
「そうかもね。でも、違うかも」
「じゃあ何だ？」
「こうと決めるには情報が足りない。だから、共に感じてもらいたかったのよ。それだけかな」
「なるほどね。だから、あの熱心な誘いか」
「あら、それとこれとは話が別じゃない？　混同するの？」
「え？」
「同情イコール仲間なの？　相手の意志も無く？」
「……え？　じゃあ何で？」
てっきり、そういうことかと思ったのだが。
「何でって、最初と変わってないと思うよ？　ｗｉｎ－ｗｉｎな関係を築く的な？」
「ああ……」
そうか、つまり。
こいつは単に「すごいものがあるよ、こっちに来て！」みたいな感覚で僕を呼んだのか。
手当てまでしておいて、なんとまぁ人間味の無い。
「これで入部してくれても、上手くやっていけるのか？」
状況が状況だし、あの娘は多分ノーとは言わないだろう。それがか

えって嫌になる。
「見返りに、最低限の助けはするつもりだけど」
「辞めないように？」
「あれ、そういう話だったじゃない？　違ったっけ？」
「いや、間違ってない」
実際になるって考えたら、上手く行かないような気がしただけだ。

延々と続く無理数を見ると機械性を感じるが、その機械を作るのは人間しかいな

終わりません、まだ

どうして遅刻したのかといわれても「自転車に乗るのに遅れたから」としか（前

つづく昼休み

どうして遅刻したのかといわれても「自転車に乗るのに遅れたから」としか

今更渋ったところで、羽山を責められる権利は全く無いと思う。当たり前だが。
むしろ嫌な役を任せてしまった、罪悪感さえある。もっとも、本人にその意識はないだろうが。
だから、まぁなんだ、せめて金くらいは出すか。
「あ、何、おごってくれるの？」
「慰労だよ。みんなへの」
「そう？　じゃ、ありがと」
千円札でパン五つと牛乳三つ。過不足無く取り替えて、購買を引き上げる。
「んで、どうすんの？」
「何が？　あのコ？」
特別棟の廊下を戻りながら、羽山はパンの物色を始めた。紙袋をガサゴソとまさぐる。
「いや、公平に選べよ……さっきのコの好き嫌いとか知らないし」
買う前に聞けばよかったのだが、興奮していたので忘れてしまった。
全く、慣れないことはするもんじゃない。
「機会の公平と現時点でのパンの種類の把握は全くの別問題だと思うけど。あ、これカスタード？　クリーム？」
その二つにどれ程の差がある？
「買ったとき横に居ただろ」
「聞いてなかったから。適当に返事しなきゃ良かった」
そうだったか？　会話は成立していたと思ったが。
思い出す。
購入時、羽山に言った言葉は「おごるけど、何か欲しいパンはあるか？　無ければ適当に買うけど」
ああ、確かにこれには「うん」とだけ答えれば問題は無い。

質問の仕方が悪かったか。
（……いや、悪いのはこいつの態度だ）
危ぇ。思考が迷子になっていた。
「ハル？　何か言った？」
「いや別に。それより珍しいな。いつもなら言っていないことまで聞いているだろ」
「えー、そんな、覚り妖怪みたいに言われても」
困るけど、と言いながら羽山はパンの袋を両の親指と人差し指で摘む。
「って、いやだから封を開けるなマジで」
「大丈夫、一つだけあいているのが悪いんでしょ？　これだけでなく全部の封を開ければ、公平になると思わない？」
「あぁ……って、騙されるか。公平なら何でもいいわけじゃない」
「じゃあ、波動関数を収縮させていると思えば？　そもそも、封を開けるまで本当にパンがあるかどうかはわからないでしょ？」
シュレディンガーの猫か。いやよく知らないけど。
「封を開けるまで云々って、それ、透明なビニール袋にも適用できんのか」
「このビニールは本当に透明なの？　私たちが透明と思っているだけで、実は違う可能性は捨てきれないと思わない？」
……うるせぇ。
「邪推だ」
クオリアまで持ってくんな。哲学したいんならソフィーとやってろ。
「考えることを辞めたらそれまでだと思うの」
「違うことを考えればいいだろ」
今は別に考えるべきことがあると思う。
「言いたいことはわかるけど、それなら今考えてもそんなに意味は無いでしょ？　それとも……」
羽山の指が梃子のように動き、クリームパンが宙を舞う。
キャッチミスしたら強制的に羽山のものにしようと思う。

「何とかしようって、思ってる？」
クリームパンの選択肢はまだ消えないようだ。
「いや別にっって、うおっ」
パンが胸に跳んできた。ファンブルしつつも、どうにか抱きとめる。
「リバタリアン」
スナップさせた指をそのまま、僕に向ける。
「あん？」
「自由であろうとする者。かなり極端だけど」
「よくわからんが、それがどうした」
「知らないのなら結構。あんなのになりたいって人種はどっか吹っ飛んでるし」
よくわからんが、お前が言うな。多分まともだ、そいつらは。
「でね、ハル？　仮に私がリバタリアンかどうか知りたかったら、何て訊く？　あ、直接はナシ」
「直接聞くんじゃ無くて？　なら、そうだな……」
腕を組む。
リバタリアンが何かはわからないが、とりあえず自由なものらしい。
「あなたは自由ですか？　とかか」
「ん、そんな感じ。じゃぁ、第二問。この国の青少年の、死因のトップは？」
「交通事故だろ」
「やるね。さすがニューサー」
ｅｒはそこまで万能じゃない。
「じゃ、ネットでいじめって検索してみたことある？　星の数より多いんじゃないかってくらいヒットするの知ってる？」
話が跳んでばかりだな。
「したことないけど、驚きはしないな」
いじめなんぞ珍しくもなんとも無い。一学年に一件くらいはあるんじゃないだろうか？
「でさ、ウチの学校、あ、中学も込みでいいよ？　そこで交通事故

にあった人、何人聞いたことある？」
「……いや、無いな」
これは単に、僕だけが聞いていない恐れもあるが。少なくとも事故死はない。
「いじめにあっている人は探せば直ぐみつかるのに、ちょっと変だよね」
「何がだよ」
言いながらも、心の中では両手を挙げている。
あっさり見透かされたか。
「気になるところは、あの娘が死んでしまわないかどうか。でしょ？」
やはり羽山、お前は覚りだよ。
「そうだ。いじめイコール自殺ってのは短絡的だけどな、そうなる奴がいるってのも事実だろ。わざわざ出張っていくほど熱血漢でも人情家でも無いけど、関わった以上はあんまり放置するのも、何と言うか……」
「バツが悪い？　そう思う？」
「やっすい道徳心だけど」
すっと手を伸ばし、僕の手の中のクリームパンを、羽山が抜き取る。
「お話をします。あるところにAさんとBさんがいました」
パンを袋に戻し、羽山は続ける。
「二人は迫害されていました。結果、Aさんは耐え切れず自ら命を絶ち、Bさんは引きこもりになりました」
「童話？」
「いえ、即興。でね、ハル。二人の差は何だと思う？　同じ目にあって、死んでしまう人と死なない人。違いは？」
「いや、そりゃ……なんだろな。考え方とか、それまでの環境とか？」
「多分ね、うつか、うつじゃないかだと思う」
「うつ？　うつ病か？」

「そう言われているみたいよ。私は精神科医でも臨床心理士でもないから詳しくはわからないけど」
ああ、お前の意見じゃないのか。
「そうした考え方は無かったな……でもどうやって確認するんだ、そんなの」
まさか本人に訊くわけにもいくまい。仮にそうでも、自覚症状があるとは思えない。
「ん、そのうちテストしてみましょ。ＣＥＳ－Ｄとか、簡単なのあるから」
「……頼むよ」
よくまぁ、こう知識がぽんと出てくるもんだ。どこかにカンニングペーパーでも用意しているのではないかと疑いたくなる。
（カンニング……？）
いや、待てよ。
「ちょっと待て、そのセスデーとやらは、前々から知っていたのか？」
「……うん？」
あ、こっちを見ない。
「パン何買ったか知らなかったのって、ひょっとして……」
「バレたか」
舌を出す。赤い。
「携帯で調べていたの。短絡的にもね、私も同じこと思ったから」
なんだ、この無表情め。
人でなしじゃなかったのか。

どうして遅刻したのかといわれても「自転車に乗るのに遅れたから」としか（後

完結していません

特に思いつかないわけがわからない（前書き）

五月半ば

特に思いつかないわけがわからない

ゴールデンウィークは瞬く間に消え去った。

「そろそろ中間テストが始まりますけど」

長期休暇への未練が消えないまま、二週間は過ぎただろうか。

昼休みの屋上に支倉凛が居る違和感にも、そろそろ慣れてきた。

とは言え、まだ打ち解けたわけではなく、ぎこちなさは残ったままだ。そろそろ対策を考えなくてはいけない。

なにせ、幽霊部員になる気配が全くないのだ。

「テスト？　来週だっけ？」

羽山が応答してくれたので、僕は無言。パックの豆乳（アーモンド味）にストローを通す。

（助かった……）

豆乳を啜りながら、今のうちにと望遠鏡のキャップを外し、黒点観察の準備に勤しむ、振りをする。

（……はぁ）

憩いの場であった、昼休みの屋上。プライベートスペースは大分侵略された気がする。

それでも、クラスより人が少ないだけマシではあるが。

「あたし、高校のテストって初めてで。去年はどんな感じでした？」

「簡単。中学のやり直しみたい」

吹いた。

「どしたんです？」

凛がわざとらしく首をかしげる。

くそ、これで話を流せなくなった。

羽山の発言は間違いでも嘘ではない。だからと言って、真に受けていいものでもない。

「羽山の偏差値はこの高校に合ってないぞ。素直に受け取ると痛い

目を見る」
易いか難いかなんて判断は主観に寄る。偏差値を十以上下げて入学した羽山の感覚は、この場合参考にしてはいけない。
「えー！　すごい、先輩、頭良かったんですか！」
「ううん。単に知ってただけ」
人間の記憶力は、ＨＤに換算すると七テラバイトに相当するらしい。羽山はその容量をＰＣみたいに使えている。
「そんなぁ。数学とか、暗記じゃ無理っすよ」
「そうでもないけど。問題パターンは限りがあるし。青チャート一冊やっちゃえば楽よ」
表情通りに、羽山は淡々と答える。
「へぇー」
東大受験に必須の参考書、チャート式（青）の厚さと難易度については、あえて言及すまい。
「でも私はその程度。大したこと、何もできないから褒めないでね」
目を伏せ、ため息混じりに言う。持ち上げられるのは嫌いな様だ。
「そんなこと無いです！　あたしの怪我も、セロテープみたいので助けてくれたじゃないですか。あれって、すごいですよ？」
セロ、は余計だ。単にテープでいい。
「あれはハルもできる」
「え、そですか？　すごいっすね！」
凄い、凄いも連発されるとその重さが消える。語彙が無いのか。
もし僕が彼女の立場なら、もう少し言葉を選ぶ……いや、違うか。
黙っているだろうな。そちらの方があっている。
このまま静かに黒点を描いればいいのだから、
「じゃぁ、ハルさんも頭いいんですね？」
振るな。
「……普通だよ。この学校の偏差値の通りだ」
「あ、じゃぁ、あたしと一緒ですね」
口の端を上げる。どうしてこの娘が天文部に来ているのか、理解が

できない。
コミュニケーションが苦手だろうとした羽山の推測は、何処へ行ったのだろう。
「そうね、ハルの頭は……」
羽山が言いかけ、停まる。僕の頭が何だよ？
「……確か、心理学的に、頭が良いって褒めちゃ駄目なんだっけ？　頑張ってはいるよね？」
黒点を描くシャーペンの芯がバキリと折れる。
「お前に教育される謂れは無い」
「あ、枝毛みつけた。凛、ハサミある？」
「無視するな！」
「いいじゃないですか、ハルさん。あたし、羽山先輩に教えてもらいたいですよ？」
笑いながら仲裁に入る凛。これには噛み付けない。
「そうか……僕は嫌だ」
「そんなこと言っていいと思う？　後悔するよ？」
淡々と言いつつ、凛からハサミを受け取る。枝毛は本当だったのか。
「するか」
「撤回しないと二度とノート貸さない」
無表情に、刃先を僕に向ける。
それは卑怯だ。別問題として扱うべきだと思う。
「ごめんなさい」
「早いっすね」
突っ込んだのは凛。一月かけて気がついたのだが、この娘、偶に言葉が乱雑になる。
「あ、そだ。羽山先輩、これ約束の……」
クッション代わりにしていたスクールバックを漁り、何やら青の四角形を取り出す。
「これ、卒アルです」
その言い方だと、アルコール依存症を脱却したようにも聞こえる。

「持ってきてくれたんだ。ありがとね」
いつも通りの無表情で受け取る羽山。アルバムなんぞ、何に使うのだ。
「凛のクラスはどれ？」
「これです、次の次」
興味があるとは到底思えないアルバムを捲る羽山と、その肩に寄りかかる凛。違和感だらけの光景に混じる気にはなれず、一人望遠鏡の片付けに移る。
（羽山がなぁ……意外に情が移ったのか）
ウィリアム症候群の間逆に位置するような奴であったと思っていたが、これは少し認識を改めたほうがいいかもしれない。
僕より遥かに打ち解けている。
「あれ、凛ってこれ？」
「そうですよー。って、恥ずかしいですね、この頃と比べられると」
中学卒業してから半年も経っていないだろうと思うが、声には出さない。本人としては多大な変化があったのだろう。
「こーいう写真って、初めて撮ったんですけど。普通のと違って、どっか変ですよね」
「わかるわかる。妙に平面だよね」
そういうものか。僕には差がわからないけど。
「あ。ごめんなさい。この後体育だからもう行きますねー」
支倉凛が立ち上がる。
よかった、これで落ち着ける。
「下まで一緒に行っていい？　邪魔？」
「そんな、全然いっすよ！　それじゃ、ハルさんはまた部室で！」
ぶんぶんと威勢よく手を振って、二人とも去っていった。
（……）
久しぶりに、沈黙が帰ってきた。
（どうするかな……）
機材を返しに行くにはまだ早いので、しばらくはここに座っている

か。やっと静かになったことだし。
ニュースサイトでも見ていようと、携帯を取り出す。
「……あん？」
メールが着た。もちろん、羽山から。内容は「そこにいて」
「何だ？」
受信時刻は今さっき。要は、直ぐ戻ってくるからという意味なのだろうが。
さっき、口で言えばよかっただろうに。
よくわからない。

五分程度で羽山は戻ってきた。Ａ四の紙と一緒に。
「これ見て」
羽山が寄こしたのは、先ほどのアルバムのコピー。三年三組の見開きだった。ブレザーの見本市のようである。
「これがどうした」
「ゲーム。支倉凛をさがせ」
ウォーリー？
「わからなかったら、千円」
「どういうことだ」
「今月厳し……ハル、まだあの娘の顔覚えて無いでしょ？　わかるなら当ててみて？」
「……」
まぁいい。ついさっきまでそこに居た人間だ。思い出せなくもどうにかなるだろう。
だって、アルバムの写真には名前が書いてあるのだから。
「……って、おい、これ」
「名前なら消したけど。当然じゃない」
くそ。

コピーに写されたはずの名前は、一文字残らず黒マジックで消されていた。
「甘い。こんなもん下を見ればいいだけだろ」
紙の裏にし、太陽に晒す。
「甘い。消した上でもう一度コピーしたから」
芸が細けぇよ。
「どんだけ周到なんだ。金ないんだろ……？」
「千円のための投資だから」
おのれ、と呻きながらも考える。ショートカットはなくなったが、まだヒントはある。
「まだ諦めないぞ。名前を消しても、あの娘の名前がなくなったわけじゃない。こういうのは大抵アイウエオ順だから、どこら辺にいるかは予想がつく」
「これ、本当はそーいうゲームじゃないんだけど」
うるさい。当てればいいんだろうが。
コピーを見直す。
履歴書かパスポートに貼るような写真が横に四列並んでいる。背景は校舎だろう。枚数は、上の二列が八枚、下が十枚。
（単純計算で、三十六分の一……）
初期の消費税以下のパーセンテージである。ランダムで指すのならば、まず当たらない。
（ここから絞る……ハセクラだから、最初と最後の一列はないとして）
三十六から八と十を引いて、十八。五パーセントに増税。
（えー……ここから男を引く）
今更。本来真っ先に引くところだったかもしれない。
これは丁度半数いたので、十八引く九で九。確立がやっと一桁を超えた。
「ハル、制限時間、あと五分ね。昼休み終わるから」
「ハーフタイムは？」

「有料」
本当に金無いのか。
（顔は……思い出せない）
記憶の中の支倉凛の顔には靄がかかっている。目鼻などがある中心は濃くて使い物にならない。
参考になるのは較的薄いところ、外側だ。
（あからさまに違えばわからなくもない。輪郭は極端に尖っていたり、細かったりしていれば印象に残っているはず……太っていてもわかる）
と思う。
次に体格だ。身長は高くはなかったし、旋毛も見たような気がする。多分。よって低いのではないかと思われる。あとは胸か。特別大きくはなかった。
写真は肩までしか写っていないが、身長は背景の後者と比較すればいい。
以上を加味して、
（これで四枚、っと）
大分絞れたが、勘で当てるにはまだ早い。
（他に何か……。服装は……全員ブレザーでネクタイ着用……。髪型は……変わるから当てにはならない。って、ぐだぐだ考えてもまとまらないな。一度整理して見るか）
四つ子を順にじっと見、特徴をまとめてみる。
まず長女。所在地は二列目後半。髪は肩より長い。制服のネクタイがだらしなく、曲がっている。
次に次女。所在地は三列目前半。髪は肩まで。顔がやや黒く焼けている。白い花の付いたヘアピンをしている。
更に三女。所在地は三列目中盤。髪はショートで、茶色。
最後四女。所在地は三列目後半。髪は肩にかかる程度。よく見ると、首に細いチェーンがかかっている。
（で、現在の支倉凛だ。髪は肩までで、染めてはいない。肌も普通。

体形や制服の着こなしは標準……多分。アクセサリーは、覚えて無いな。派手なのはなかったと思うが）

今ひとつ足元が安定しないが、やるしかない。

「どう、わかった？　それとも降参？」

「絞れてはいる。この四人だ。順に長女次女三女四女と仮命名する」

うん、と羽山が頷く。

ここからは消去法だ。可能性の低い順に消していく。

「……で。多分、長女は違う」

「どうして？　勘は駄目だからね？」

絶対と言える確信は無い。駄目と言われても、最終的には頼ることになるだろう。

それでも、理由くらいならば挙げられる。

「ネクタイが変だ。右に向いている。普通、裏側を引っ張りつつ、利き手で締めるもんだろ？　このとき、引く側に比べ、締める方の動きは慎重になる。そのため、曲がるとしたら利き手と逆側になりやすい」

実際に自分のネクタイをいじりってみせる。

「そね」

「つまり、長女は左利きである可能性が高い」

「うん。で、肝心の凛はどっちだっけ？　覚えてる？」

「覚えてない。が、羽山。お前は右利きだ」

付き合いは長い。こちらは流石に知っている。

「それでさっき、枝毛は切れたか？」

利き手が違うと、ハサミは切れない。羽山が凛のはさみを使えた以上、二人の利き手は同じということになる。よって、支倉凛の利き手は右であると言える。

これは、ネクタイの向きと一致しない。

「ん、正解。この娘は違う」

心の中でガッツポーズを決める。これで三分の一。

まだ絞れる。

「次に次女。こいつもおかしい。肌の色が違う」
支倉凛の肌は、別段黒くは無い。次女の肌がもし地でこの色ならば、間違いなく別人である。
「このときだけじゃないの？　日焼けじゃないって否定できる？」
そう、考慮しなければいけないのは日焼けの可能性だ。
しかし、これは低いと思われる。
「多分違う。卒業アルバムの撮影は、一般的には新学期、つまり四月か、せいぜい五月に行われる。この時期に肌が焼けているとしたら……春休み中の海外旅行か屋外の部活動くらいだろ？」
「うん」
そして海外旅行については、まず無いと言っていい。
「海外に出るためにはパスポート、つまり証明写真が要る。しかし凛は先程、アルバムを見て『こうした写真は初めて撮った』と言った。二重国籍でも持っていない限りは、矛盾する」
ただし沖縄に出かけていたら有り得るが……これは運が悪かったと諦めよう。三月に沖縄に行く人間は少ないと思うし。あくまで可能性の話だ。
「まぁいいと思うよ？　でも部活は？」
次いで屋外の部活動の可能性。こちらも否定できる。
「そっちのが無いな。日焼けするなら、屋外の部活だ。んで羽山、屋外の部活って何がある？」
「そうね。サッカー、テニス、陸上、ソフトボール……」
「要するに運動部だろ？　で、思い出してみろ。彼女はテーピングを知らなかった。いや、知っていたのかもしれないが、それはセロテープと混同する程度でしかなかった」
どれも怪我の危険がある部活だ。所属していたのなら、テーピングを知らない道理は無い。
「故に、次女も支倉凛じゃない」
「正解。じゃ、最後は？　わかる？」
残っているのは三女と四女。

ここから先は、更にはっきりとは言えない。
当てずっぽうよりはマシという程度だ。
「卒アル見たときの『この頃と比べられると恥ずかしい』って台詞、覚えているか」
「覚えてる。ってか、さっきから参考にしているの、見事についさっきまでのやりとりだけど？　日頃何も考えてないの？」
無視して続ける。ほっとけ。
「この写真を撮ったのは、ほとんど一年前。いくら成長期と言えど、それほどかわるものじゃない」
ただ恥ずかしいのならばわかる。僕だって見せたくない。ただそれは、比較されるからではない。
「あえて比べてと言った以上、一年前と今では、明らかな違いがあると見做すべきだ」
そこで考えて見る。人の概観で変化が明確な部分はどこか。
ぱっと浮かぶのは身長と体重。
今現在の支倉凛の背は低い。縮んだのでなければ、身長ではない。
また、この二人がやせても太ってもいない以上、体重でも無い。
「ならばどこが変ったか。簡単、髪だ」
人差し指で二回、三女を突く。
さぁ、どうだ？
「故に、四女は支倉凛ではない」
「うん、当たり。この娘は違う」
「よっしゃ！」
思わずガッツポーズ。
高校入学してから一番の快挙だ。帰り、チャーシューメンでも食べよう。
「どうだ？　正解するとは思っていなかったろ」
「あのね、ハル」
あん？
「私は本人を探せと言ったんだけど？　現状、ハルは違う人間を違

うといっただけでしょ？」
あん？　思ったより細かい奴だな。
とは言え、今の僕には勝者の余裕がある。わざわざ言い返しはしない。
「言えと言うなら言ってやろうか。三女、この娘が支倉だ」
「はい不正解」
これで終わりである。
さて、望遠鏡を戻してくるか。
「……ん？　ちょっと待て。今、正解の前に不を付けたか？」
「付つけたけど。バカじゃないの、全然顔違うじゃん」
なッ！？
やはり四女だったのか？　でも、それは違うと言った筈だ。ならば、長女か次女のとき、何か聞き漏らしたか？
（いや違う、そうじゃない）
そもそも、羽山はあの四人の中に支倉凛がいるとは言っていない！
「しまった……四列目の誰かだったか。くそ、端折んなきゃよかったか」
「不正解。四列目にもいません」
「え？　まさか、一列目？　でもそれじゃ」
「またまた不正解。違います」
んん？
おかしい。ならば輪郭や身長で弾いた中にいるとでも言うのか……？
「正解は、こちら！」
じゃん、と何時になく高いテンションで、新しいコピーを開いて見せる。
「ここの真ん中少し下、中央辺りに凛はいます！」
声と違い、表情は死んでいる。いや、睨んでいるのか。
「真ん中下って、やっぱ三列目じゃ……？」
「本当に注目すべきは、ハルから見て左上。クラス書いてあるけど、はい、これ何組？」

「三年五く……」
はっとする。僕が今まで、必死に探していたコピーは、
「四組、だと……！？」
騙された。
正解なんて無かったんじゃないか！
「気づいたようね。クイズ支倉凛を探せ、その答えは『いない』でした」
「おま、ふざけんな！　意味無いじゃねぇか」
こんなものは無効だ。ごねて消してやる。
「うるっさいっての！」
意外にも怒鳴り返された。しかも、僕以上の声量で。
「ハル、あんたこの一月何見てたの！？　何もわかって無いじゃん！」
「いや、それは」
「そんなんだから私も何時まで経っても髪型変えられないんでしょ！　これ古臭いし面倒だし、夏暑いんだから！」
「……いや。その、すまん」
「わかればよーし」
手を出してくる。逆らう気力はもうない。
「あの、これ、野口っす」
日頃温厚な奴が怒ると怖い。
「ありがと。来月ごはんおごったげる」
それ元は取れるん……何でもない。
「あとこれ、このコピーあげるから。よく復習しときなさい」
復習……面倒臭い。それに、どうせ覚えられやしない。
「髪型も変わって無いから。ちょっとだけ明るい髪の、肩くらいまでの髪ね。全体的に猫っぽい感じだから。わかった？」
へい。

頼むからここですんな。夏は終わったんだよ。（前書き）

夏休みの後

頼むからここですんな。夏は終わったんだよ。

「――もしもし、ハル？」
そうだ、と言ってやりたいが叶わない。僕の携帯は今、他人の手にある。
「てめぇ、誰だ？」
「誰って……それより聞いて、あんたの母さん、事故ったって！　かなりヤバイみたい！」
いや、良く通る声だ。ここからでも聞こえる。
「お願い、早く帰ってきて！」
これで無事に登校できそうだ。
ありがたい、ありがたい。

「――ということが今朝あったんだ」
二時限目から雨が降ってきたので、昼休みは部室で過ごすことにした。
「あれ？　まだ感謝の言葉を聴いていないけど？」
確かに言っていない。朝はほとんど遅刻同然だったから、会話すらしていなかった。
「助かったよ」
「オーケ。でも、気をつけてよね。携帯奪われちゃ、道場の意味無いじゃない」
面目ない。先生が聞いたら何と言うか。いや、無言で殴りこみに行きそうだから、言っては駄目か。
「でも、羽山先輩、どうしてわかったんです？　それだけで、その……」
言い辛そうにしていたから、代わってやる。被害がなかったから、

気にしていない。
「カツアゲだって？」
凛は唇をすぼめ、無言で頷く。
「だって、ハルにかけて、誰だって言われたんだもの」
「それだけですか？」
「うん。他の人ならそうだけど、ハルの場合はね。携帯、私くらいしか登録してないし」
失礼な。他に家族とバイト先くらいは登録してある。
「どれだけ寝ぼけて電話とっても、女の声で私だって気づくのよ。それを誰だ？　って返されたら、そりゃハルじゃないじゃない」
「でも、ハルさんが携帯を落として、たまたま誰かが拾ってくれてたって可能性は？」
「あるけど、善意のある人なら、誰だなんて言わないんじゃない？」
確かに。警察官でも同等だろう。あるいは出ないか。
「あの場合、ハッタリかましておいて損は無いのよ。違ったら謝ればいいんだし」
なるほど。評価すべきは思い切りの良さか。
「それで、羽山。電話の用件はなんだったんだ？」
「ああ、それね。今はいいわ」
そうか。
珍しい時間の電話だったから、何の用か気になっていたのだが。
まぁ、あえて突っ込むまい。
「そうだ、ハルさん。番号、教えてくれませんか？」
「何の？」
「あのね、携帯以外に何があるっての？　学籍番号？」
羽山に軽く小突かれる。そうか、携帯か。
「あまりに無いことだから失念していたんだよ……」
「ハルさん……」
憐れまれる謂れは無い。
「しかし、やり方、わからないな……」

赤外線通信、その他アプリ諸々、全てに疎い。羽山のときは、本人がやってくれた。仕方ないが、今回は諦めるか。
「私が送っとく」
羽山が要らん船を出した。
「ありがとうございます。……あ、着た。ハルさんにはメールしますね」
うん、まぁ。
「ちゃんとしてよ」
面倒臭い。どうせ連絡なんてしないと言うに。

放課後。
電光石火で羽山が消えた。アルバイトがあるらしい。
僕もあるのだが、あいつとは違いまだ時間がある。部室で時間を潰そうと思い、職員室に寄る。
「あれ？」
生物準備室の鍵がなかった。
いつもは壁のフックに掛かっているのだが。
誰か先に寄ったのだろうと思い、無手で特別棟へ向かうことにする。
昇降口で豆乳（バニラ味）を購入し、特別棟の階段をだらだらと登る。
（ん……？）
二階の踊り場で、珍しく、他の生徒とすれ違った。しかも女子である。
（この先には天文部しかないはずだけど……？）
顔は見ていないし、見てもわからないが、多分、支倉凛だったのではないだろうか。
他に心当たりも無いし、辻褄も合う。
「まぁ、それなら部室は開いているということだ……」

生物準備室のドアに手をかける。
開かない。
「……あれ？」
おかしい。
再度トライ。がたん、と引っ掛かる。
さっきの支倉が鍵をかけて出て行ったのだろうか。面倒なことを。
「くっそ……」
メールを探し、支倉凛に電話をかける。
しないと思っていたが、早速することになるとは。
「もしもし、支倉か？」
「あれ、ハルさん？　どうしたんですか？」
「いや、鍵。持って行っただろ？　部室入りたいんだけど」
「鍵って、お昼はハルさん持っていませんでした？」
あん？　昼の話なんぞしていない。
「昼は返した。そうじゃなくて、さっき……いや、待て。今、そっちどこにいる？」
「教室ですけど」
なるほど。先ほどの女子は、支倉凛ではなかったらしい。
「ごめん、勘違いだ。今日こっちに来るつもりはある？」
「そのつもりです」
「じゃぁ、すまないが、職員室によってきてくれないか？　鍵を持ってきて欲しい。なければ、構わない」
「わかりました。すぐ行きますね」
通話を切る。
これで見間違い、またはタイミング悪く先生が使っていたかどうか検討できる。
「……ん、ちょっと待て」
と、言うことは、だ。
支倉と二人で時間を潰さなくてはいけないのか。
鍵なくてよかったのでは……？

豆乳を啜る。失敗した。

「ハルさん、ありませんでした」

二人きりだの気まずさと、鍵の紛失の責任とを天秤にかけていたが、強制終了。

支倉凛が部室に来てしまった。

「ごめんなさい……」

いや、謝る必要は無い。

「そっちの責任じゃないよ。とりあえず、職員室に戻ろう。顧問に言っておかないとだ」

生物の先生でもある、我が天文部の顧問。井沢先生が使った可能性もまだ残っている。

「怒られます？」

「どうだろ。温和なオジサンだと思ってたけど、あんま交流無いからな……」

大会も発表会も無い部活なので、当然顧問の指導にも熱が無い。井沢先生は幽霊部員ならぬ、幽霊顧問である。

「まぁ、怒られるとしら僕だろ。それより、支倉……さん？」

心の中ではフルネームで読んでいるため、いざ口に出したときどう呼んでいいのかわからなくなる。「さん」をつけていれば無難だろう。

「何ですか？」

「羽山は帰ったんだ。僕もバイトがあるから、一時間ちょっとで帰る」

「あら、そうなんですか」

だから、そっちも帰れ。

「じゃ、ちょっとしか居れませんね？」

「あー、いや、まぁ……」

そうくるか。完全予想外。「こんな陰気な奴と居られないっす！」とか言って帰ればいいのに。
「あ、でもそっか。部室にも入れないと、居る居ないじゃないっすね」
「……うん」
もういいや。相槌だけ打っていよう。沈黙は恐れまい。
「鍵なかったら、怒られて帰ります？」
「そだね」
どっちかと言うと、そうなりますよう。

期待というものは何時だって裏切られる。
少なくとも、僕の人生においては。

「どうしたの？」
アルミの机に向かい、なにやらパソコンをいじっていた先生に「すいません」と声をかける。
「すいません先生、部室の鍵が無いんです」
「うん？　準備室の？」
少し伸びた顎髭をいじりながら、首をかしげる。
「おかしいな、鍵なら戻したけど」
お。
この反応は、責任を問われないパターンか？
「先生が使ったの、何時ですか？」
「午後だよ。四時限目」
やった、完璧に違う。僕が犯人ではなくなった。
「おかしいな。確認しようか」
ゆっくりと立ち上がる。こうなってしまえば、最早どっちだって構わない。

先生の後ろに付き、鍵置き場まで行く。
「あれ？　あるよ」
瞬きを二回、三回。
その合間に消えるでもない。
「ありますね……」
「ホントだ……」
いつものように、鍵がかかっていた。
「君たちの見間違いかな？」
先生が笑う。僕も笑いたい。
「え、何で？　先生、あたしさっき見たとき、ホントに」
「すいません、勘違いだったみたいです」
面倒くさいので遮る。わざわざ穿り返さなくてもいいだろう。
「終わったら、ちゃんと戻しておいてね」
はい、と頭を下げる。先生は席に戻っていった。
「ハルさん、あたし、ホントに」
「わかるよ。僕だって同じだ」
とりあえず鍵を取る。
「とりあえず、あとは部室で」

「どうしてだったんですかね？」
部室のドアを引きながら、支倉凛が唸る。嫌な予感がするから、僕は息を止めておく。
「確かに無かったのに」
支倉凛の反応が無い。大丈夫だとこっそり吸息を始める。
「……どうしてだろね。不思議なこともあるもんだ」
ド畜生。
窓を開ける。換気だ換気！

「ハルさん、わかりません？」
「さぁ」
とは言うものの、鍵が戻っていた時点で予想は付いていた。今では確信に近い。
説明は面倒なのでしたくない。
「……あと、何か変な臭いしません？」
「気のせいだろ。それか、窓開けたからかな」
「そですか？　うーん……」
羽山といいこの娘といい、どうしてこんなことが気に掛かるのだろう。もっと無関心に生きていいと思う。
「やっぱ、あたしやハルさんじゃわからないっすよねー……。羽山先輩に明日訊いてみましょっか」
脳の血管の感覚がわかった。多分切れたんだと思う。
ふざけんな。
自然に言われた分、イラっとくる。
「あれ、ハルさん？」
「思いついたことがある。着たばっかりで悪いが、鍵閉めて戻ろう」
「え……はい」
返事を聞く前に窓を閉める。僅かの間だったが、新鮮な空気は入った。十分だ。
「思いついたって、鍵ですか？」
「うん」
他に何があるのだ。僕が考えるのがそんなに意外か。
鍵を取り、さっさと部室を出る。
「あ、待って待って！」
いっそ閉じ込めてやりたいが、それでは意味が無い。ちゃんと出てくるのを待ってから鍵を閉める。
「で、誰が何で持っていったんですか？」
ボールを目にした子犬みたいな顔で訊いてくる。悪気がないのは知っているから、邪険にはできない。

「この室の鍵を持っていった以上、この部屋に用があったんだろう」
階段を下りる。先々月の転倒事件を思い出すが、無視。
「そうですね」
顔に「それで？」と書いてある。
「問題は、『誰が』だ。でもこれだって、普通に考えればわかる。
天文部の部室を使うのは、やっぱり天文部員だろ」
「羽山先輩っすか？」
「いや、違う。部員はもう一人いる。今からやるのは、その確認」
「本人に会うんですか？」
「いや、多分もう帰ってる。携帯は知らないな」
「じゃぁ、どうやって？」
本校舎に移る。目的は二階、三年の教室だ。
「知っているかもしれないけど、ウチの学校の時間割、コマは学年共通なんだ」
「はい」
「今日、一、二年は六時限あった」
それは僕と支倉凛が証明できる。
「それで、四時限目までは先生が使っている」
支倉凛が人差し指を立てる。
「つまり、使われたのは五か六時限目ってことですね！」
「そのはず」
三年の階である、二階まで上る。入る教室はどこでもいい。
「やっぱり……五限で終わりだ」
手近な教室の壁。貼られていた時間割は、考えの通りだった。
「使ったのは三年だ」
「あ、でもハルさん。サボリの一、二年の可能性はありません？」
「あるにはあるが、低いと思う。部室に入るには鍵が要る。サボるのに職員室には入れないだろ？」
「あ、そっか。あたしバカだ」
話を戻そう。

「つまりは、天文部の三年が使った可能性が高いってことだ」
「いるんですか？　天文部の三年生って」
今学期、一度も来ていないのだから知らないのも当然か。
「いるよ。ウチの……部長だ」
ポケットの中の携帯が震える。メールだ。「明日、登校三十分早め」
もちろん、羽山からである。

「おはよ」
昇降口で羽山と会う。眠い。
「おはよ。悪いわね、付き合ってもらって」
豆乳（コーヒー味）投げてくれる。ありがたいが、これにカフェインは入っているのだろうか？
「いーよ。一人では行きたくないだろ」
部室に向かう。これは終わってからゆっくり飲もう。
「理解しているなら早いわ。あのバカ、メール返信寄越さなかったから面倒で」
来いといわれたからには、そうだろうなとは思っていた。
ああ、ヤダヤダ。
「そういや、羽山は何で気づいたんだ？」
「昨日の朝、部室のカーテンが揺れていたのを、たまたま見たの」
「なるほど」
昨日の電話はそれで、か。
「ハルは？」
「昨日部室前で女子と擦れ違った」
「放課後もやってた訳……？　馬鹿なの？」
羽山の語気が荒くなる。
珍しいような、そうでもないような。

「で、どうするつもり？」
部室までやって来た。足音も話し声も隠さずに来たから、中の人間も気づいているだろう。
ただ、互いにドアを開ける気にはならない。
「こうすんのよ！」
言うと同時、勢い良くドアを蹴った。
「部長ッ！　家でやりなさいッ！！　この後、私ら使うんですからね！？」

一夏のアバンチュール、と言うか、ホラー

夏休みは一瞬で過ぎた。

毎度のことだが、どうして休みは早く過ぎるのか。ジャンプ四冊読んだ以外に、楽しかった思い出が無い。

「新学期って、どうしてこう、やる気でないんだろ」

下敷きで仰ぎながら、羽山。部室の机に足を上げ、首は椅子の背にだらしなく垂れている。

残夏に溶けているようだった。

「お二人とも、休みはどこか行きました？」

比較的元気な支倉凛が訊く。羽山は応えそうにも無いから、僕がつまらないことを言う。

「どこにも」

実際には道場の合宿で長野に行った。

嘘をついたのは、土産を買わなかったからである。

「んー……私は、長野に」

羽山が足を机から下ろし、鞄をまさぐる。

「はい、これお土産」

桐の小箱を渡す。そう言えば、こいつ、ジャムとか買っていたような。

「わ、嬉しい。じゃぁ、先輩、あたしもお土産です」

こういった、休みを無駄にしなかった的な報告はどうにかならないのか。休みの間くらい、何していたっていいだろうに。ましてや、それを間接的に共有しなくてはいけない道理は無いはずだ。

「ハルさんも、はい」

うなぎパイ。

「……ありがと」

そして、この返さなかったときの罪悪感は何だろう。本当、悪しき

習慣だ。
「名古屋に行ったの？」
「お父さんと一緒に。お城、見てきました」
「家族旅行ね、いいな」
精神的にも体温的にも温度差のある二人だが、それでも会話は成立していて、途切れもしない。
「先輩の長野も素敵です。何観ました？」
「山とか、緑とか。基本、トレーニングだったからキツいだけ」
「そうですか……えっと……。あ、そうだ！　先輩。あたし、去年の夏休みに幽霊。観たんですよ」
「うん？　貴方もバカなの？」
いや、「も」ってなんだ。「も」って。
「えっ……違います！」
気を使って話題を変えたのだろうが、可哀想に。
「本当なんですよ。深夜で……二時くらい。あたし、線路沿いの公園にいたんですけど」
「そう」
また先ほどの、女子としてのたしなみを放り投げたような姿勢に戻る。
「そこに、ばーっと一本、電車が通ったんです」
「回送でしょ」
「違いますって。人が乗っていたんですよ、それもぎゅうぎゅう詰めで！　終電、とっくに終わっている時間ですよ？　あたし、それ見て怖くって、ダッシュで家に帰ったんです」
怪談を力説する支倉に、ごろりと寝返って背中を見せた。珍しく、やる気がないらしい。
なんだかなぁ。
やはり、違和感がある。元々、ある程度はあったのだが、長い休みを挟んだせいか、以前より強くなった、と思う。
そもそも、だ。

この一年間、屋上は僕と羽山だけの寂しい場所だった。会話も途切れ途切れの、クラスに適応できなかった者の避難所だった。
それが、今は一人増えて土産物を交換している。騒々しい声までである。
ここは僕が居たかった場所だろうか？
（いじめも……放って置いても、もう羽山がいる、か）
支倉凛の問題については、羽山が支えてやれるだろう。僕がしなくてはいけないことは無い。
安っぽい善意が動機では、ここらが限度だ。
「悪いな、先帰る」
立ち上がり、鞄を取る。
「え、もう？　早くない？」
最近は、アルバイトさえなければ下校時刻までいるようになっていた。
いつの間にか感化されていたわけだ。
「そうでもないよ。また」
「うん、また」
「お疲れです」
振り返らず手を振って、戸を閉めた。
（羽山が行っていたな。いざと言うとき、走れないと……）
鞄から、貰ったパイを出す。
（意味が無い）
階段の前、息を吸う。集中。踊り場目掛け、土産を高く放る。
それと同時、膝を曲げて、跳ぶ。一気に十数段を飛ばす。
落下時に一瞬だけ生まれる、この内臓が浮くような感じには、多分永遠に慣れないだろう。
足の底が床に着く。追いついてきた自分の体重に合わせ、膝を曲げる。前転をするスペースは無いから、これだけで衝撃を殺さなければならない。両手を着く。
蛙の様な姿勢になる。衝撃はとりあえず消えたが、まだ終わってい

ない。四足で立ち上がって、上を見る。
真後ろで、くしゃ、とパイの潰れる音がした。
「やっぱり」
呟く。
「走るには、持ってちゃ無理か」
まぁ、わかっていたことだ。

「ハル」
四週間と二日経って、月が二桁に乗った初日の、放課後。
「何？」
廊下で、羽山に呼び止められた。
「最近、部室に来ないの？　どうして？」
「いや、行ってるだろ、昼は」
「放課後のことを言ってんの」
わかっているでしょ？　と睨む。まぁ、くだらない返しだったか。
「悪かったよ。でも、特に理由は無いんだよな」
「なんとなく来ないってわけ？　今日も？」
「そうなるな」
「来いって言ったら？」
「行くよ」
別に、何が何でも行きたくないわけでもない。実際、昼はいるのだし。
「じゃぁ、来なさい」
「ああ、わかった」
「それと……」
左手の一指し指を一本、垂直に立てる。
「一つ、疑問があるの。確認してくれる？」
そうだろうと思った。結局、用も無しに、こいつは僕に話しかけな

い。
「この前の、幽霊の話、覚えてる？　凛の話よ？」
「ん……あー、多分」
確か、僕が最後に放課後に出たときの話だったような。満員電車の幽霊だっけ。
「あんなもん、羽山なら一発だろ？」
「当たりはつくわよ、そりゃ。当たり前じゃない？　ハルだってわかるでしょ？」
今回は頷ける。
こいつが支倉の恐怖体験を流したのは、興味がなかったからじゃない。僕にも辿り着ける程度に、答えが明らかだったからだ。
「ああ、救済措置だろ」
支倉凛の話は、まとめると、終電が終わっている時間に電車が走っていたと言う、それだけのことである。
問題は、その電車が無人の回送では無く、満員だったこと。
「人が乗っていたのなら、折り返しや回送じゃない。単に、終電が遅れたと考えればいいだけだ」
「そうね、同意。私も、他の線で事故か何かあって、それに合わせて終電を遅らせたか、臨時で増やしたんだろうなって思ったんだけど――……」
歯切れが悪い。
「ど？」
「ちょっと気になって、と言うか、そんな事故の記憶がなくって、調べてみたの」
こいつのレベルになると、一年前のニュースも把握しているらしい。
「そうしたら、やっぱりね、なかった。いえ、あるにはあったのだけれど」
「けれど？　あったんだろ」
「そうだけど。でもね、事故は、九月だったの」
うん？　それのどこに問題があるのか。

「要は、勘違いだろ？　入学前のことだったはずだし」
「そうだと思う。でも、ハル、おかしくは無い？　普通、夏休みと新学期の記憶、間違える？」
「だから、一年前だろ？」
「一年しか前じゃないのよ」
そこら辺は人によるとも思えるが。皆が皆、お前の様に何でもかんでも記憶できるわけではない。
「訝しがるなら、疑問をもう一つあげる。いい、凛が電車を見た時間、覚えてる？　深夜の二時の公園ってやつよ？」
「一応、深夜ってのは覚えてる」
具体的な数字までは忘れてしまっていたが。一年前の事件事故を覚えているのだから今更不思議も無いものの、本当、一月近くも前のことをよく覚えているな。
「中学生の女子が、どうしてそんな時間に、そんな場所に？」
そう言えば。怪談との前振りがあったので、さして気にならなかった。
「それは……仲間内で、花火とか？」
「なら、なんで友達と花火しているときに見た、って言わなかったの？」
花火などしていなかったからだろう。それくらいは、実はわかっている。
「まぁ、そうだよな。一人でいたんだろうな。だけど、そんな理由はわからねえよ」
言いながらも、一つの可能性に気づく。嫌な可能性だ。あえて口に出したくも無い。
「そう？　思い当たる節はあるでしょ。何だかんだ――何もしてなかったけど――、ずっと、気にはかけていたんだから」
なるほど、わかったのならば言葉にしろと言うことか。
わかったよ。
別に誤魔化したわけでもない。ここまで言われてようやく連想でき

ただけのことだ。
「いじめ、か？」
以前、羽山が言っていた。いじめが始まったのが今年の四月だとしたら、あまりにも早過ぎないかと。
だが、中学校の時点で、既に始まっていたのなら。綺麗に説明できる。
終電の幽霊と同じだ。見方を変えれば、なんてことはない、直ぐにわかる。支倉凛へのいじめは、中学校からの延長だったのだ。
「おそらく、あの娘、九月は不登校だったんでしょうね。だから、夏休みとの記憶が曖昧になった。それに、深夜、公園、電車。踏み切りこそ無いけど、これだけワードが並ぶと、もうね」
ああ、なるほど。
道理で僕を呼ぶはずだ。
「で、ハル？　部室どうするの、寄らずに帰るの？」
「いや、だから行くって」
「明日からは？」
「……行くってば」
「よろしい。それじゃ、私、教室に鞄取ってくるから、先に行って。裏切らないように」
流石にそこまで非情ではない。
「あ、それと」
今度は人差し指を僕の顔に向かって水平に、刺すように指す。
「物を投げて、跳んで、受け止めて？　訓練すればできなくはないから。むしろそれくらいのスキルを諦めるなら、道場、通わなくいいからね？」
着地の音でも聞かれていたのだろうか。
恥ずかしいったらありゃしない。
「来年の合宿で、精進します」とだけ答えて、部室に向かうことにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3312bg/

ａｎｔｉｄｏｔｅ

2015年6月11日23時06分発行